

窯体内で降灰を受けた34も、口縁部の一部や口頸部全体を意図的に割った土器とみられ、鋭利な破断面を各所に持つ。粗雑な平底をなす底部付近は調整も粗く、復元すると口頸部も焼け歪みのため、大きく傾く。底は厚く、重量感が感じ取れる。口縁端部はヘラ切り風の面取り整形がなされている。口縁部や体部に意識的な打ち欠き痕をみる35も粗雑な底部、口縁端の面取りなど、34と共通性のみられる平底で、窯内で破損した土器片の付着をみたまま、本墳に供されたものである。底部付近に気泡の膨張が認められる（図版45、47）。

36は台付長頸甕である。算盤玉形の体部に口頸部と脚台を付ける。口縁部は9.8cmの高さを持ち、端部付近で外反する。口頸部内面には製作回転中のシボリ目が観察できる。体部中位よりやや上に位置する肩部の傾斜変化点に1条の凹線が、これより1cm程下に1条の弱い凹線が走る。脚台部は、長方形を呈した3方の透かし孔が穿たれ、裾端部は反り状に肥厚させ、幅1cm未満の面を持つ。灰色を呈し、全体として堅緻な焼成を示す。7世紀代の所産である（図版43下）。

37は短頸甕である。手持ちヘラケズリやヘラナデによる外底面の平坦さと独特の器形から、どっしりとした安定感をみせる仕上がりとなっている。体部外面下半には粘土紐巻上げ痕を消すように指オサエ調整が観察でき、最終調整は回転ナデによって仕上げる。自然釉は外面の上半（肩部より上）と内底面に濃密度にガラス状の付着をみせる。また、外底面には窯壁の一部が融着しており、この土器を正置させることは困難である。粘土紐積み上げによる成形段階で生地に空気が入っていたため、各所で器面の膨張や剥脱痕が観察される。降灰、自然釉の様相が34をはじめ、多くの釉が掛かる須臾器と類似し、不良品とも覚しき土器を供献している点は、これまでの資料とかなり共通性がみられ、さらに口縁の打ち欠きを伴う点も同巧である（図版46）。

38～41は壺とその円孔の切り抜き円板である。頸部から口縁端部にかけてラッパ状に開く口縁部を持ち、口縁部は二重口縁のように、頸部から外反しながら立ち上がり、凹線状の界線と段を有してさらに外上方へと伸びる。両者ともに口径が体部最大径を超えるか倍伸するものであろう。また、穿孔は体部最大径の位置よりやや上に空けられ、ちょうど穿孔レベルに先行する凹線が1条走る。その他の加飾は一切ない。40・41は壺の器体内に落ち込んでいた切り抜き円板で、40には抜き取る際の竹管刺突痕が観察できる。製作時から古墳に供献されるまで伴出してきた点は興味深い。中間過程での実用はおそらくないことを意味するのだろう。なお、39は底部をヘラ切りの後に指ナデして平底を形成している。38・39共に口縁部を意図的に打ち欠いており、供献時に一斉行われた儀礼行為の一環を証している（図版44）。

第105図は、須臾器の大甕である。中央やや西寄りから出土したもので、総数45片に及ぶ破片を接合したもので、ほぼ完形に復元できたが、口縁部の1/3を大きく欠いている。器高44.4cm、体部最大径40.8cmを測る大きさで、復元口径は18cm前後になる。丈高の器体を有し、底部の形態に不安定要素を残す。最大径が肩部と体部の変化点に位置し、器体上半に重心が偏るため、やや怒り肩の印象を受ける。口頸部は厚めに作られ、外反しつつも直立さみに立ち上がり、外面の加飾は行われなものの、口縁部外面には端部から0.5～1cm程下と、中程近くに浅い凹線が不整に走る。成形や調整痕については、口端が内傾するていねいな面取り風のヨコナデ調整がなされている。体部外面に細かな平行タタキ（5本/cm）の後、回転作用を利用した指頭によるナデを施す。内面は底部から口縁部直下まで同心円当てで具痕がみられる。当て具の原体径は5cm前後であろう。叩き技法と同様、原体は小振りである。いびつな底部付近はやや厚めの粘土帯積み重ね残痕が残り、外面タタキの方向を異にしている部分の内面当て具痕は少なくとも原体自体が異なることが瞭然としている（拓影参照）。色調は内外面共に暗い灰色であるが、表層に限られており、器壁全体は灰紫色を呈している。この土器の他の特徴として、底部に坏Gの蓋や窯壁が融着している。そのことから、7世紀前半～中頃の時期に比定できよう（図版48）。

第106図は、須臾器の横甕である。焼け歪みが著しい器体であり、口径は10.6～11.4cm、器高は21.1cmを計測する。体部は依形を呈し、短軸18.6cm、長軸28.6cmを測る。俵を縦に置く形で粘土紐巻上げ成形を行い、片方を底部として閉塞状態として積み上げている。底部側面の器壁は厚くいびつで、上方へは粘土帯の接合痕を解消し、薄く引き伸ばす。タタキ成形も貫徹されていないのは、底部付近を自重支えのため、タタキ出しの最後まで厚くしたためであろうか。内面同心円当てで具痕のナデ消しもほとんど行っていない。また、原体の縁端を当てるように用い、硬化しつつある素地粘土を押し据けようとしている。底部から体部上半にかけては、閉塞側に向かって粘土帯に応じた反時計回りの同心円当て具痕が残るが、器壁を減ずる中央付近は押圧風のナデを加え、半消しにしている。これらは、閉塞作業より前に当然行った作業工程と考えられる。

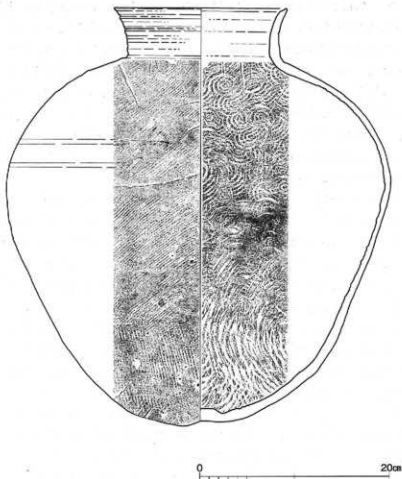
閉塞のための粘土円板は、粘土紐積み上げ最終の開口部が、6.6cm~7.6cm程を測るので、それ以上と目され、閉塞孔付近の帯状化した粘土紐2本分は締め付けを伴う水気を含む指頭圧を加え、最終端部はやや尖りぎみの髷口縁を形成している。粘土円板は内面側を凹面風に仕上げるため、不整な指オサエ調整がみられる。外面調整は、平行タタキの後、丁寧なカキメ調整を施す。外面の底部側には、土器片と窯体の破片が融着している。タタキ調整による器壁内の空気抜きが甘かったためか、器面の膨張が数ヶ所で観察できる。

口縁部は最終工程で作られており、本体の中央に径7~8cmの粘土板状の器壁を切り取り、その周縁に内側から粘土紐の積み上げを行い、開口部との接合は粗い指オサエを行っている。口縁部は焼成の関係でひずむが、内外面ともにヨコナデ調整を加え、端面を作り出して、口端を尖りぎみに終える。口縁部の半分を中心の一部自然釉

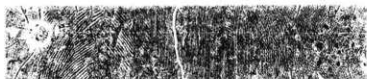
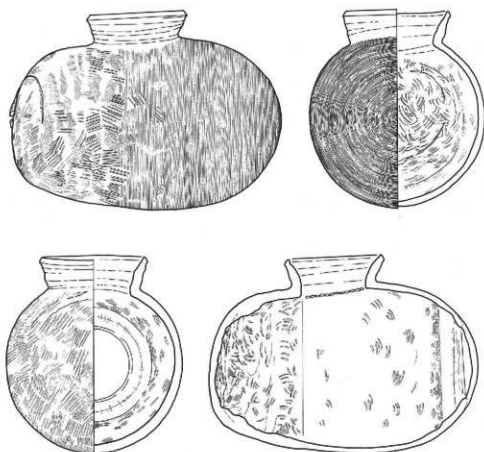
を帯び、淡い紫色を示す器壁断面は層状の焼き上がりとなっている。他のテラス面供獻土器群と同様の窯で同時に焼かれたものとみられ、品揃えを意識した共通する要素が多々みられる。灰色を呈し、底部側外面の一部に輪状の黒斑が認められる（図版49・50）。

第107図1~12は、テラス面にて出土した瓦質土器・土師器をまとめている。煮炊関係の器種が主体となることを特色とする。焼き上がりの異質な1は瓦質焼成の甕である。器面の磨減が進行し、一見、土師質を呈する。韓式系の土器とみられ、体部中位に最大径を有して屈折することと特徴とし、頸部から短く立ち上がる口縁部を持つ。端部は面をなし、内面側には軽い突出を、外面側には軽い段を形成して、頸部へと至る。底部は器面の剥脱が著しいが、平底風の丸底である。体部下半には指頭圧を加えつつ粘土紐の巻き上げを行った痕跡を留める。復元口径14.0cm、器高も同じくらいになる。2~7は土師器の小振りの甕である。全形を残す資料は少ない。図上完形品となった2の底部は丸底で、やや横ぶりの球形を示す体部に外反する口縁部を持つ。口頸部の屈曲は、基本的には緩やかな「く」の字が多い。口端内面は少し膨らみをみせる。調整技法は、外面がハケメ調整、内面が指ナデによって仕上げる。外面のハケメ調整は、頸部から体部上位が縦方向のハケメを、体部中位から底部にかけては斜め方向に外底面全体に施す。残存率の高い2・3をみると、口径は約12~15cmで、器高も約12~15cmを測るものが多いようである。いずれも7世紀前半から中葉に比定される。中型の甕である3も、口端の内面が僅かに肥厚する特徴をもつ。5・6は、口縁部の端を丸く収めるやや薄手の土器で、口頸部の「く」の字状屈折も弱くなる。これらの甕はいずれも淡黄褐色を呈する明るい色調の土器で、器壁が厚めの4を除いて、胎土中に鉱物粒があまりなく良好である（図版52上、54下、55、60）。

8~10は土師質の把手付甕である。扁球形の体部に対向する把手を付け、口縁部は短く「く」の字状に外反する。体部外面は細かなハケメ調整を、内面は指押さえや指ナデ調整を施す。8は体部中位に黒斑が観察でき、上



第105図 墳丘裾部テラス面出土土遺物 実測図 1/4



〔外面拓影〕

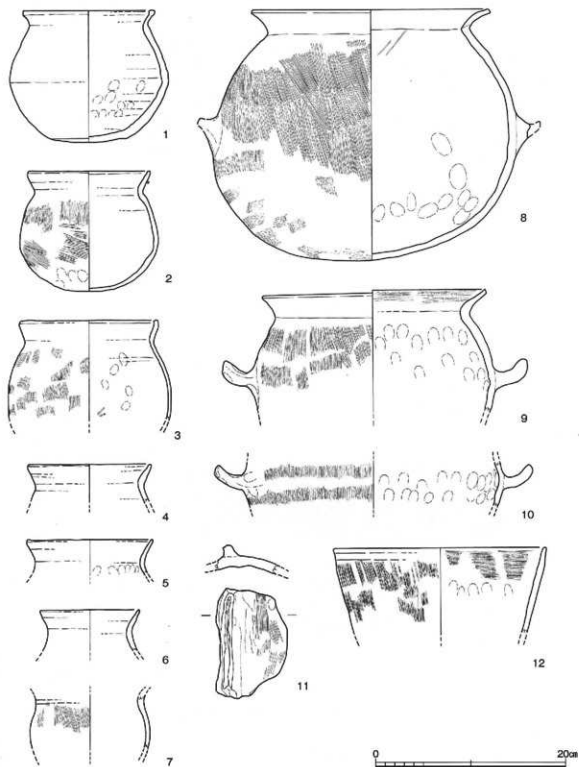


〔内面拓影〕



第106図 墳丘裾部テラス面出土遺物 実測図 1/4

半のハケは細かく横細。下半のハケメが磨滅していることから、一定期間使用されたものと思われる。89片を接合してほぼ完形に復せたもので、口径25.0cm、最大腹径32.3cm、器高26.7cmを測る。口縁部端面は面取り調整されるが、口縁部全体はかなりいびつ。8同様、口縁部に歪みの認められる9は、器体の上半部のみが、約半分しか残存しない。「く」の字状に屈折する口縁部の末端は僅かながら内面にシャープな立ち上がりみせる。体部外面は斜め縦方向の端正なハケ調整を施し、内面には指頭圧調整痕を留める。復元口径23.0cm、残存高18.8cmを測る。黄白色系の色調を呈している。10は胴部の残欠で、把手部のみを残す。把手部の下面には薄く煤の付着を見ることができ、使用痕跡が残っている（図版53、55）。



第107図 墳丘裾部テラス面出土遺物 実測図 1 / 4

11・12は土師器の甕形土器と甕である。いずれも器面にハケメ調整を施す。11は、甕の焚口の底部に連なる突帯に相当する断片で、タガ状の粘土帯をしっかりと貼り付ける。外面にはハケメ調整（6本/cm）が観察できる。胎土に長石・石英・暗赤色シャモットを多く含む。器面の磨減が著しく、被熱痕跡や煤の付着は観察できない2小片の接合。12の甕は、バケツ状の形態に復元できるタイプのもので、口縁部内面に横方向のハケメ調整が観察できる。口縁部の端面はナデで平滑ぎみに仕上げる。石英・長石などの鉱物粒、暗赤色のシャモットを比較的に含み、淡褐色に焼き上げられている。復元径は22.4cmを計測する（図版54）。

前庭部出土遺物 前庭部に設定したトレンチからは、予想以上に土器が出土している（第108図）。1～8は須恵器の坏である。高坏の蓋や身に復元可能なものもあろうが、一応、まとめてレイアウトした。1は復元径から有蓋高坏の蓋になる可能性が高いが、細片のため器種は不明瞭としておく。天井部と口縁部の変化点に1条の凹線が巡るが、より形骸化したものである。旭塚古墳では微量伴うことが普通化できる。破片2は庵山石の敷布面から出土した貴重な遺物である。端部は丸く収め、緩やかな稜を有して天井部に至る。変化点直下に浅い凹線が走行する。胎土は良質。7世紀代の遺物である。傾斜の著しい3は、口縁部の内傾具合から、蓋の蓋とも推測できよう。胎土は精緻で、焼成も良好である（図版62）。

4は、坏身で立ち上がり端部は欠損する。細片のため口径については言及すべきでないが、TK209～217型式の範疇で理解したい。5～8は坏身である。いずれも7世紀前半から中頃の時期に比定できよう。5は薄作りのシャープな口縁部片である。ていねいなヨコナデで仕上げられる。径10.2cm、器高3.7cmに復された6は、20数片の細片がかなり接合できたもので、東Ⅳ区において散在出土した。坏身とみたが、坏蓋になる可能性もある。7は器肉芯が暗灰紫色の焼けを示す。外面にシャープな小段差がみられる（図版56、62）。

9～11は高坏の脚部片である。9は透かし孔を穿つ脚柱下半部で、透かし孔下端レベルに弱い凹線は1条巡らす。10は短脚無透かし、無蓋の断片。端部は拡張し、シャープなつくりをなす。堅い焼き上がりを示す11はやや大きめの裾形で、長脚になり、2段構成の透かし孔が入る可能性が高い。内面に見られる鏝状の工具痕はヘラ記号ではなく、糸状のものの当たり圧痕である（図版62）。

12・13は平瓶の口縁部である。口縁部に歪みを生ずる12は、灰白色～黄灰色の明るい色調を呈し、胎土中に含まれる0.5mm以下の黒色粒子が顕著である。内面には緑黄色の自然釉が付着する。細片の13は器壁が薄く、口径なども正確な資料。12は東Ⅳ区と西Ⅳ区の出土資料が接合した（図版56）。13は西Ⅱ区からの検出（図版62）。

14は一見、土師質の様相を呈する半焼けの須恵器の甕口縁部である。東Ⅴ区から出土した。軟質で焼成が悪く、磨減も進んでいるため、器面の回転ナデの痕跡はつかめない。口端面にきわめて浅い凹線状のヨコナデが入る。

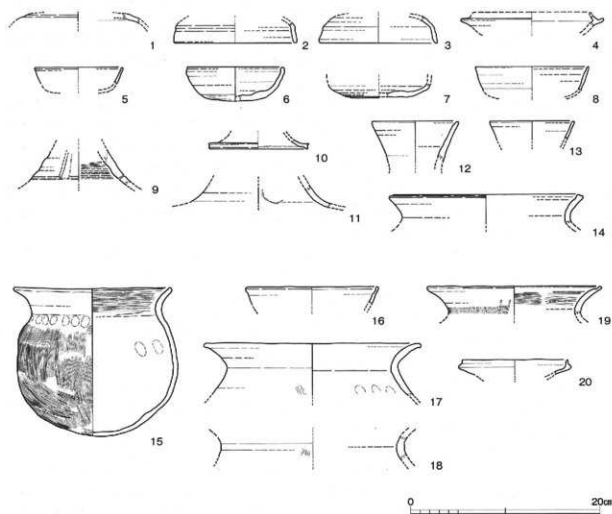
15～20は土師器である。15・17～19は甕、16は坏、器台状の20は器種が不明である。ほぼ完形で遺存していた15は、Aトレンチ溝201から出土した土師器甕と類似し（第99図3）、九底の器体に短く反外する口縁部を持つ。外面調整のハケメは体部中位を境に大きく2工程に分けて施される。また、口縁部内面には横方向のハケメが施される（図版52下）。17～19も同様に反外口縁をもつハケメ調整を施す甕である（図版62）。

16は飛鳥時代の坏である。端部のみの細片であり、暗紋やミガキの観察ができる部位は遺存していないが、色調明赤褐色で、口縁端部は巻き込み調整がみられる。

20は器種不明と上記したが、極めて焼成が不良な須恵器坏、もしくは須恵器模倣土師器の可能性が考えられる。すなわち、土師質焼成の上に磨減が進み、受部の欠損破断面と器面の判別が付きにくい資料と化したことも考えられてよい（図版62）。

石器 出土地点ごとに記載しなかった石器を一括報告する（第109図）。1・2は打製石鏝、3～6は剥片である。いずれもサヌカイト製で、肉眼観察では二上山産と判別できる。1は長脚鏝で、基部に長い逆刺を作り出し、先端部と片方の脚部を欠損する。粗い両面加工を行っており、縁端の押圧剥離は比較的丁寧に行われ、鋸歯状を意識したトリミングを施している。鏝身は残存で2.9cm、厚さは最大で0.4cmと薄い。重さは1.3gを測る。パティナーを帯び、破断面にも風化が観察できることから、欠損後の廃棄が考えられる。Aトレンチ周溝内（X=28.215、Y=11.216、H=79.621）から出土した。縄文時代前期の打製石鏝と思われる（図版64）。

2はほぼ完形の小型の打製石鏝である。凹基無蓋の基部をなし、鏝身は長さ1.85cm、幅1.5cm、厚さ0.25cm。重さは0.5gを測り、軽量である。片方の逆刺先端を欠損する。欠損面は漆黒色を呈する。押圧剥離は、やや粗雑で、強いパティナーに覆われる。Aトレンチ南端の須恵器・土師器の一群を覆う黄色砂質シルトからの



第108図 前底部出土遺物 実測図 1/4

出土。縄文時代の所産である（図版64）。これらは、山芦屋遺跡と関わる遺物とみられる。

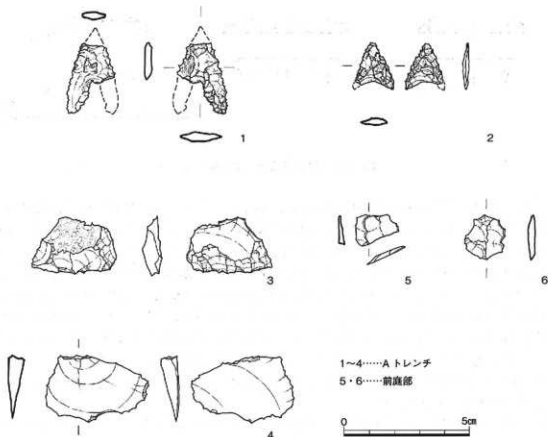
3は円礫とみられる原礫からの第1次表皮剥片で、背面に灰白味の強い風化自然面を残す。ただし、腹面には押圧剥離による微細な剥離調整が施されており、刃縁の形成が認められる。刮器的な機能を持つ小型のスクレイパーの可能性を考えてよい。Aトレンチ北端の深掘トレンチ壁面（褐色砂礫層）から出土した（図版64）。

4はAトレンチ南半域、中央東西セクション南側の礫混じり黄褐色粗粒砂から出土したサヌカイト剥片である。厚さは最大0.7cmで、重さは7.5gを測る。最大厚を測る1辺に打面調整が観察できる。素材剥片の可能性が考えられる。風化が認められるが、二上山産とみて大過ない（図版64）。

5は前底部西IV区の黄色極細粒砂から出土したサヌカイトチップである。重さは0.4gで、薄く、軽い。

6も前底部（東IV区）から出土した。サヌカイトチップで、重さ0.6gを測る。周辺で石器作りが行われたとみられる（図版64）。

表面採集資料 第110図1は耳環である。楕円形を呈し、長径3.2cm、短径2.9cmで、断面は概ね正円形に近いが、長径0.8cm、短径0.7cmを計測する。完形で、重さ10.2gを測る。青銅軸に金を巻き、両端の小口は0.75cmの比較的大い間隔を空ける。鍍金の遺存状況は良好であり、発色は鮮明で美しい光沢と材質感がみられ、錆化は進行していない。表採品ではあるものの、帰属層位は2通り考えられ、他地からの客土もしくは敷地内供給の造成土である。古墳の副葬品と見て大過なく、先ずは塚塚古墳からの出土が推定され、また、別古墳が損壊を受けて移動土砂に紛れ込んだ遺物の可能性が考えられる。耳環はその属性の分析から、これまでに中実から中空化、大



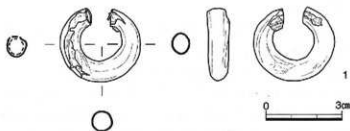
第109図 石器 実測図 1/3

型から小型化、太目のものから細目のものへ、断面形は円形から楕円形へ、開き部の端面形態が直線状から弧状へ、その仕上げが被覆から切断へと考えられており、一般的には古い要素を留めている。ただ、開き部の造作手法には村上分類のⅡ型が容認でき〔村上2001〕、技術的には新しい傾向をもつもの（7世紀代）と理解している。なお、劣化している部分の観察からは、銅管芯に貼られた金箔部分の厚さ0.025cm前後とみられる（巻頭図版15）。

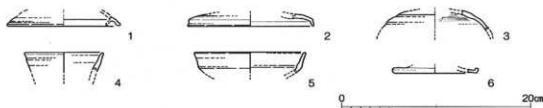
その他表面採集遺物 1～6は、事業地内で調査中に表面採集した遺物をひとまとめにする（第111図）。すべて須恵器で、おそらく周辺の宅地開発や社宅建設時の造成で遊離・混入したものと考えられ、本来は旭塚古墳もしくはその周辺の遺構や包含層に帰属する遺物と考えられる。坏蓋1～3は共に細片ではあるが、おきな時期幅が認められる。1は坏G蓋の口縁端部、2は同じ坏蓋でも扁平なツマミが付くもので、8世紀以降の年代に下降するものであろう。坏蓋3は、1より古くなるもので、坏Ⅱに分類される。内面の起伏調整にカキ目状の擦過痕がみられるのは珍しい。4は平瓶や長頸壺の口縁部であろう。

5は坏身もしくは高坏であろう。6は高坏の脚裾端部である。5は蓋になる可能性もあるだろう。6は、底径8.8cmに復元でき、大きさからみておそらく無蓋の低脚高坏になるだろう（図版63）。

前庭部出土竜山石 調査地付近はもちろんのこと、兵庫県南東部で産出しない播磨産竜山石が前庭部で多数検出された。出土状態については先に記したとおりであるが、



第110図 耳環 実測図 2/3



第111図 表面採集遺物 実測図 1/4

剥片・砕片・粉状片、さらに母岩の一部とみて大過ない50cmを超える大きさの石材まで含めて、総点数は3万8千点前後を数え（第3表）、トレンチ外に広がるものを加算すればおそらく4万点に達するであろう。総重量は330kgを測る。その中で特徴的なものをごく一部抽出し、実測したものが第112～114図である。出土した竜山石はその重要性に鑑み、全点採取を心掛け、可能な限り持ちかえり、個別観察とカウントを行った。前節にも詳述したが、製品面の一部とみなせる人為的な平滑面を持つ石材が一片たりとも含まれていないことは、遺構の解釈や竜山石自体の役割やありように一定の制約を与える要素となるであろう（図版65～68、巻頭図版16～19）。

竜山石とは流紋岩溶岩が噴出し、火砕流がカルデラ湖内で堆積・凝固した火山凝灰岩のことを指し、「印南石」「宝殿石」のように産地・地名と深く結びついた別称を持つ。現在の市制では高砂市や加西市、郡路市などに広域分布する。生成地質年代は、中生代白亜紀後期（約7000万年前）で、阪神間の六甲山地域で見られる花崗岩の生成年代と時期をほぼ同じくする。

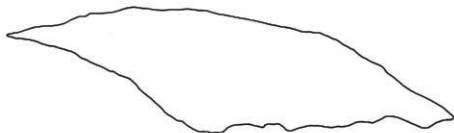
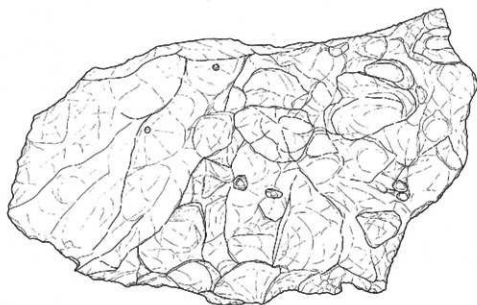
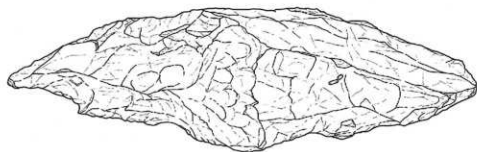
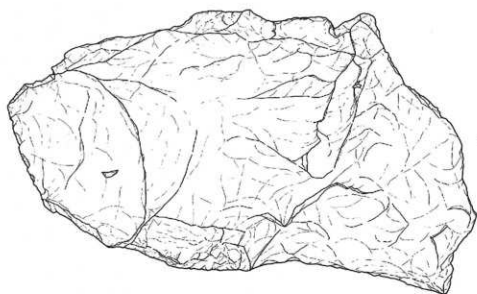
また、「長石」「高室石」など小地域ごとの産地細別の名称があり、地元の研究者・石工には色調、鉱物粒、質感、水もち、硬軟、岩肌の特徴や特性からその違いを見分けることができるようで、同じ火山凝灰岩でも地域によって岩相に異なりを見せることが知られている。現段階では自然科学的な産地同定を経っていないが、調査期間中の研究者検討会にも参加して頂いた、竜山石産出地をフィールドにする清水一文氏（高砂市教育委員会）に調査終了後の取り上げサンプルを改めて実見して頂いたところ、土中内であっても風化を受け黄色になるはずであり、青味（緑色）が残っていることに疑問があるが、鉱物粒や質感、岩肌は極めて石宝殿付近の竜山石に近く、「長石」や「高室石」とは一見して異なるとの所見を得ている。

この様に前庭部と石室内床面で検出した凝灰岩は、肉眼観察の上で極めて高砂市竜山付近で産出される竜山石に近似し、現段階ではすべてを竜山石と認識し、記述を進める。

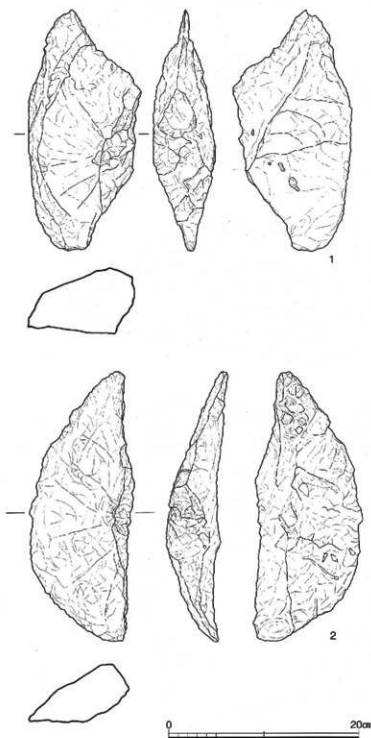
第112図は、最大長49.5cm、幅30cm、厚さ13.2cmを測る竜山石で、調査地から出土した石片の中で最大の石材である。腹面には8ヶ所以上の打点が観察でき、当石材は大剥片であるが、素材利用できるものであり、このような大振りの石片から剥片や砕片を多数獲得していったことが窺える。また、石材の縁端部にもスケールこそ違えど、石器で言うところの押圧剥離を思わせる剥離痕が看取される。一方で、背面の凸部にはこのような打点・打痕は一切見られない。小剥片を取ることを目的としたハツリ行為が片側のみから行われたことが読み取れる。このことから、当石材自体を何かのカタチに作ることを目的の求心的な製作行為ではなく、剥片、砕片など採石・採木の作業に言ういわゆるコッパを逆に得ることがねらいであったことが窺える資料である（図版65・66、巻頭図版16）。

第113図1・2は母岩からの割り取り工程が進んだものであるものの、今回採取した資料の中では比較的大きなサイズを保つ。両者共に平面がイチヨウ葉の形態をなしており、剥離面の末端の状態は羽毛状剥離を呈する。打点が明瞭に観察でき、小さめの母岩からの第1次剥片で、その後の細部加工は行っていない。1は、最大長25.3cm、厚さは6.9cmを計測する。重さ1.35kg。1～3mm大の白色粒・黒点粒が多く含まれる。表面には鉱物粒が抜け落ちた整った穴が観察できる。2は、最大長28.3cm、厚さ6.1cmを測る。重さは1.22kgである。本資料を整理中に実見した池田明生氏（熊本県立美術館古墳館）は、これら2石の打点形状を観察し、一辺2～3cm程度の隅丸方柱状の鉄製工具の打撃により割り取っている可能性が高いことを指摘している（図版67、巻頭図版17）。

第114図は中サイズの剥片（2～16cm）をサンプリングし、6点を図化した。明瞭な打点が遺存しているもの



第112図 龜山石剥片 実測図(1) 1/4



第113図 竜山石剥片 実測図(2) 1 / 4

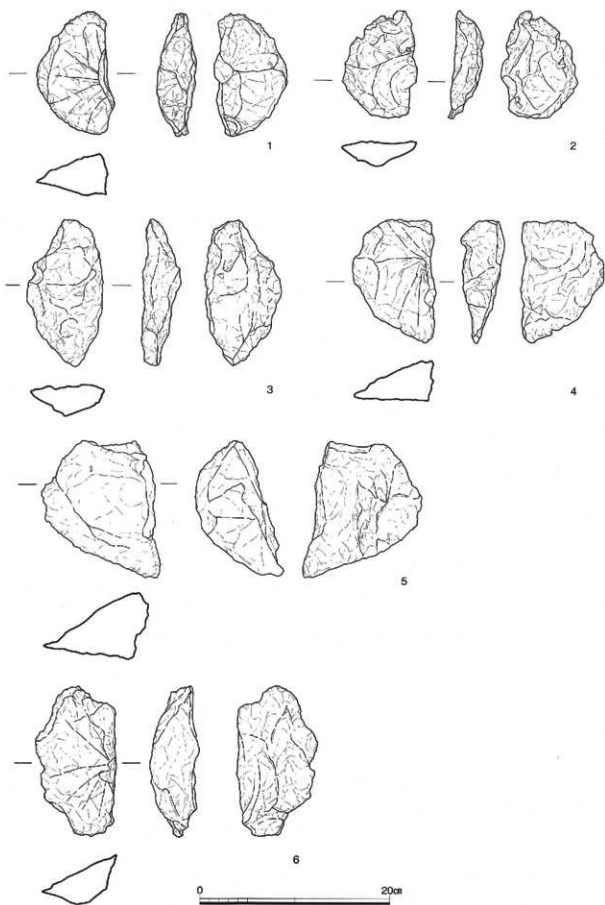
は1・2・4・6の4点である。3や5に欠損の痕跡は見受けられるが、意識的に第2次調整を施しているものは無い。岩質的な特徴は、5が5～10mm大のやや大きな鉱物粒を取り込んでいる。以下に、各石材の法量を記述する。1は最大長13cm、厚さ4.5cm、重さ290g。2は最大長11.3cm、厚さ2.6cm、重さ190g。3は最大長15.6cm、厚さ5.3cm、重さ490g。4は最大長12.9cm、厚さ4.4cm、重さ310g。5は最大長12.4cm、厚さ6.6cm、重さ800g。6は最大長15.4cm、厚さ3.5cm、重さ330g(図版67)。

以上の竜山石剥片の持つ特徴の中で、共有する点の一、二をあげるなら、①実測しなかった資料も含め、内反剥離を起こした剥片が多く、②打面側が尖頭形になる。③剥片の末端側が半円状を呈し、刃縁的に薄く鋭利になっているものが目立つ。④背面に角礫面を持つものが含まれており、原面とは言えないまでも、剥片生成工程を繰り返す意図が読み取れる。⑤相対的に大型剥片程、単剥離打面から剥離されている。⑥微小な砕片(チップ状)が生ずるような打撃行為と素材的な剥離生成工程が同居している。⑦交互剥離はもちろんのこと、一般的な二次加工による製品整形を目指した形跡がなく、欠損の所見も偶発的である。

これらの観察結果を要するに、発掘調査の進行過程で予測されたことがらの多くを排除し得る結果となった。

その第一は、竜山石の原石を調達し、家形石棺など内蔵棺の製作を行った場ではないこと、第二は、石室内に安置されていた埋葬棺を引きずり出し、前庭周辺で壊した可能性は全くないこと、第三はこれだけの剥片材をあらかじめ播磨の地で用意、運搬したものでないことであり、結論が自ずから導かれたことの意義は大きい。

(森岡・坂田)



第114図 龜山石 実測図(3) 1 / 4

第3表 石室・前庭部出土亀山石 数量・質量計測表

出土位置層位	箱数	大 (個)	中 (個)	小 (個)	合計 (個)	重さ g大	重さ g中	重さ g小	重さ g合計	整理 番号
前庭部西部図面の下位	1	1	1104	3788	4893	977	4218	1630	6825	A
前庭部西部遊離遺物	1	3	42	0	45	671	704	0	1375	B
前庭部2区西部東部図面の下位	1	1	227	35	263	127	2324	48	2499	C
前庭部北部南半	1	15	786	1220	2021	5238.5	4809.5	461	10509	D
前庭部東部	1	9	1	0	10	1820	140	0	1960	E
前庭部一括	1	1	275	52	328	77	2390	49	2516	F
前庭部東部(北半)図面下位	1	32	208	141	381	8684	2770	9.5	11463.5	G
前庭部東部	1	26	767	497	1290	5811	5220.5	242	11273.5	H
前庭部北部北半	1	34	583	909	1526	8502	5795	406	14703	I
前庭部東部図面の下位	1	7	409	243	659	1284	3276	146	4706	J
前庭部南部図面の下位	1	8	1010	691	1709	1859	6233	688	8780	K
前庭部北部図面の下位	1	4	717	1250	1971	434	4133	781	5348	L
前庭部北部と東部の区間畦	1	0	157	35	192	0	1340.5	18	1358.5	M
前庭部西部と南部区間畦(西半)	1	19	561	878	1458	3434	4408	663	8505	N
前庭部南一帯と東部の区間畦(一括)	1	5	113	59	177	595	2118	19	2732	O
前庭部北部と東部の区間畦(東半部)	1	23	1083	119	1225	4689	5776	350	10815	P
前庭部西部図面の下位	1	28	921	1211	2160	5879.5	10427	705	17011.5	Q
前庭部北部～東部の区間畦(西半)	1	4	354	410	768	1496.5	2305	253	4054.5	R
前庭部南部と東部の区間畦(一括)	1	12	302	127	441	2738	2216	93	5047	S
前庭部東部(南半)図面の下位	1	9	150	34	193	2693	2014	15	4722	T
前庭部北部と西部の区間畦(北半)	1	26	1971	551	2548	7177	7321	764	15262	U
前庭部南部	3	72	1547	501	2120	17571.5	14605.5	528	32705	V
前庭部2区1/2(北半)	1	15	235	221	480	3707.5	3861.5	29	7598	W
前庭部2区2/2(南半)	1	24	174	10	199	2801.5	2266	14	5081.5	X
前庭部	1	29	241	283	553	7474	4512.5	432	12438.5	Y
前庭部東部4/5	1	37	426	169	632	9005.5	4775.5	93.5	13874.5	Z
前庭部東部3/5	1	29	455	482	966	6787.5	6793.5	116.5	13697.5	ア
前庭部西部2/4(北半)	1	35	367	45	447	9753.5	7114	11	16878.5	イ
前庭部東部5/5	1	39	210	15	264	9949.5	3828	6	13783.5	ウ
築道部(西)奥区X=9.0以北	1	5	226	57	288	743.5	3792	29	4564.5	エ
築道部(西)南部と西部の区間畦(東半)	1	16	794	391	1201	2572	6481.5	304	9357.5	オ
築道部(西)北部と南部の区間畦(南半)	1	15	593	160	768	3019	6257.5	132.5	9409	カ
築道部(西)西部1/4(北半)	1	23	2326	1990	4339	3628.5	12458	1441	17527.5	キ
花崗岩のため欠番	1									ク
築道部(西)手前区X=9.0以南	1	1	58	0	59	120	788	0	908	ケ
築道部(西)奥区X=9.0以北	1	7	302	18	327	1104	6143	22	7269	コ
築道部(西)手前区X=9.0以南	1	2	158	0	160	229	1013	0	1242	サ
築道部(西)奥区X=9.0以北	1	7	452	211	670	1029	4419	164	5612	シ
築道部(西)手前区X=9.0以南	1	3	438	210	651	431	5623	123	6183	ス
総計		626	20743	17013	38382	144113	174670	10806	329695	

第4表 遺物觀察表

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

104-27	36	森林 環境部	-	2.2	平成25年 11.6	市/20%石炭・50%石炭灰・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良灯	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	延焼の心配なく、市街地に隣接し自 らで資材を搬入する。	210-1.2
104-28	55	建設 建設部	-	1.7	昭和57年 12.2	第一・第二 市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	台内に追加でテラスが設けられ、 1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-29	51	消防 消防部	-	1.9	昭和57年 12.2	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-30	60	平塚 建設部	平成2 6.2	1.5	-	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-31	69	建設 建設部	平成2 7.4	1.5	-	第一・第二 市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-32	69	平塚金工 平塚金工	平成2 8.2	1.5	-	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-33	47	平塚 建設部	平成2 12.1	4.6	12.2	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-34	45	平塚 建設部	平成2 15.3	6.4	15.2	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-35	47	平塚 建設部	平成2 16.4	6.4	16.6	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-36	45	建設 建設部	平成2 17.3	7.2	20.0	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-37	44	建設 建設部	平成2 18.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-38	44	建設 建設部	平成2 19.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-39	44	建設 建設部	平成2 20.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-40	44	建設 建設部	平成2 21.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-41	44	建設 建設部	平成2 22.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-42	44	建設 建設部	平成2 23.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-43	44	建設 建設部	平成2 24.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-44	44	建設 建設部	平成2 25.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-45	44	建設 建設部	平成2 26.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-46	44	建設 建設部	平成2 27.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-47	44	建設 建設部	平成2 28.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-48	44	建設 建設部	平成2 29.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-49	44	建設 建設部	平成2 30.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-50	44	建設 建設部	平成2 31.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-51	44	建設 建設部	平成2 32.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-52	44	建設 建設部	平成2 33.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-53	44	建設 建設部	平成2 34.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-54	44	建設 建設部	平成2 35.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-55	44	建設 建設部	平成2 36.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-56	44	建設 建設部	平成2 37.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-57	44	建設 建設部	平成2 38.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-58	44	建設 建設部	平成2 39.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-59	44	建設 建設部	平成2 40.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-60	44	建設 建設部	平成2 41.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-61	44	建設 建設部	平成2 42.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-62	44	建設 建設部	平成2 43.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-63	44	建設 建設部	平成2 44.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-64	44	建設 建設部	平成2 45.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-65	44	建設 建設部	平成2 46.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-66	44	建設 建設部	平成2 47.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-67	44	建設 建設部	平成2 48.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-68	44	建設 建設部	平成2 49.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-69	44	建設 建設部	平成2 50.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-70	44	建設 建設部	平成2 51.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-71	44	建設 建設部	平成2 52.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-72	44	建設 建設部	平成2 53.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-73	44	建設 建設部	平成2 54.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-74	44	建設 建設部	平成2 55.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・60%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	環境部 環境局	環境	南河 ナガサキ市	7号の 倉庫	1階部分が完成している。	210-1.2 210-1.3 210-1.5
104-75	44	建設 建設部	平成2 56.4	10.6	13.3	市/20%石炭・50%石炭灰 市/20%石炭・50%石炭灰 市/30%石炭・30%石炭灰	良	市/100%石炭・50%						

[illegible]

[illegible]

VI. まとめ

近年、全国各地において衆目を集めている終末期古墳は、古代へと連続する地域史叙述の面でも重視されている。兵庫県下において屈指の巨石墳として知られる旭塚古墳は、その代表的な存在であり、このたび、40有余年ぶりに発掘調査を実施した。表6甲の閑静な山手の住宅地にあって、その雄姿を今に残してきたこの古墳は、墳丘の東半部を既に失っていることが判明したが、石室や床面、さらに前庭部は予想以上に良好な状態で残存していたことが確認できた。第1次確認調査では、敷地全体の遺構分布状態と平面調査範囲の絞り込みを進め（V章(2)）、第2次確認調査では、この調査で対象として絞り込まれた旭塚古墳北東方のエリア（拡大調査区Aトレンチ）と墳丘および前庭部の記録調査を行い、多くの知見と成果をあげることができた（V章(3)）。本章では、それらを改めて整理し、若干の推察を交えつつ、旭塚古墳の持つ特殊性や独自性について多様な視点から言及することにより、潰れた本書のまとめとしたい。

(1) 立地の異質性

旭塚古墳は、陰宅風水の思想を意識的に取り入れた選地を大きな特徴とする（II章）。すなわち、標高260mを測る鷹尾山（通称城山）を背山として、視覚的によりスケールの大きい景観と風致の形成を利用した立地環境の中に所在する。さらに、群集墳分布域の真只中において、他の横穴式石室墳が認められなかった点もネガティブながら兆域的なゾーンの存在が窺われ、同時期の群が墳丘築造を一切許さない排他的な空間に築造された独立墳として捉えることができる。その独自性は、以下に記す墳形や内部構造、土器供献祭祀の器種や性格、播磨・竜山石の使用といった諸点にも分散的に顕現している。

(2) 墳形と墳丘構造の特殊性

墳形については、当初円墳ないし方墳の可能性が高いと指摘されてきた経緯があり（III章）、今般、墳丘南西部において、150度前後の交角をもつ外覆石辺の一部が確認されたことにより、再考の余地があることが判明した。具体的には、羨門立柱石の西約5mの一角であり、基底石の並ぶラインは、明らかに直線と直線の交わりを示し、多角部を造り出していた。その西側一辺には、高さ1.24mまでの貼石が遺存しており、墳丘外表としての急傾定角度の斜面を呈していた。この貼石には、入念な裏込めは見られなかったものの、20cm前後の自然石（主として花崗岩）を3段以上組み上げており、少なくとも墳丘の正面観では、このような造作が辺角をもちつつも連続して行われていた公算が高い。一角のみの遺存であるため、六角形や八角形など墳丘平面形の特定には至らなかったが、円墳や方墳の蓋然性を大きく排除できるデータが得られたことは、本墳の特殊性を考える上で大きな成果をもたらしたと言える。終末期古墳ならではの平面プランが確認できた意義は大きい。

一方、墳丘構造に関しては、城山から派生する微支谷地形を埋積した河成堆積物の起伏、特に高まりを巧みに利用し、それを残核状に削り出して成形されたもので、墳丘盛土の土量は墳高からみた予想に反し、極めて少ないことが確認された。墳丘背面側の西半部で検出された多重の内区列石もこの地域にあっては調査例として特異なもので、その最上段列が墳丘基盤層と盛土部分との境界を示す作業区分の痕跡と判断された。天井石を覆うことに主眼を置いた墳頂部を中心とする最終段階の封じ方と言え、墓壇の深さとともに、畿外的な要素の浸透も無視できない。

(3) 墳裾テラス面の存在と多数の供献土器

石室開口部の西側、貼石多角部を検出した部分においてテラス面を検出した。20~30cm程の落差をもって一段高く造成された面が墳丘裾に接して延びていた。後世の乱掘、工事などによる壊平によって、幅1m弱、長さ1.5m前後の僅かな範囲と化していたが、平らに整えられた面上には、夥しい数の須恵器や土器が正置されていたとみられる状態で出土した。土器類は、墳丘の崩壊に伴う動き以外に目立って移動した形跡がなく、ほぼ正確に旧状を保っていることが窺われ、隠や塔、深杯にみる3個体1組の意図的なセット関係は、個々の距離や配置などに儀礼行為における役割や属性の一端の反映が推測できる（V章(3)）。畿内中心部における大化・薄葬令の適用時期と触れ合う築造年代を示す当墳であるだけに、外部施設とはいえ、厚葬行為とも触れ合う多量の土器類の供献をみた点は、被葬者集団の地域性や特異性の一つとして認識しておく必要がある。

(4) 石室構造をめぐる二、三の特質

内蔵の石室は、全長9.8m、玄室幅2.1m、玄室長4.1m、羨道幅1.6m、羨道長5.7m、残存高2.1mを測り、壁体は主に巨石を縦位置に使用することを意識した巨石墳で、形骸化しつつも袖をもち、両輪式の横穴式石室の形式を採る。石材は六甲花崗岩を主用する。その用石法は、巨石の自然石を使用した石舞台型式と切石を用いた岩屋山型式の中間的様相を持つものである〔森岡1984、森岡・坂田2008など〕。注目すべきは、奥室直下に据え付けられた巨大な床石で、構築当初から原位置に存在したことが証明された（V章(3)）。石棚や石壁、石棺とは明らかに性格を異にするもので、両輪式横穴式石室に対する横口式石棚の基本的要素の部分的同化を想起させつつも、完全には取り込んでいないその曖昧な手法にこそ、時期差や地域性に基づく融合に加え、当墳が持つ本質的な特質の一つに数えられよう。石室構造の系譜解明には、なお腐心すべき課題を残している。

(5) 竜山石の受容とその背景

石室床面と石室開口部から南に12m隔たった前庭部で、竜山石のまとまった剥片・砕石面を検出した。竜山石は調査地の周辺に限らず、阪神間では産出地のない石材種であり、西方の播磨地域（加古川市・高砂市・加西市・姫路市など）で産出する流紋岩質凝灰岩である。古墳時代に入り、石棺材として重宝された石材であり、大王墓をはじめ各地の有力首長墳で頻例をみることができるものの、本例では石棺片の想定可能な製品加工面を残した資料は、詳細な観察にもかかわらず絶無であって、むしろ石片化、細片化の作業を連続的に進め、パラス敷きにすることが築造当初からの目的であったかのような出土状態を示した。工程の判明する数百kgを測る石材を約50km遠方から摂津の地に運ばせる目的物に対する被葬者の求心力と、他に頻例を見ない使用形態も本墳の際立った独自性と言えよう。

(6) 供献須恵器群にみられる播磨以西の要素

墳裾にテラス面が遺存していたことは、V章(3)において指摘したが、局部的に残っていたにもかかわらず、大量の土器が出土した。内訳として、土師器12点、須恵器40点、総個体数52点を数えるものの、偶発的な遺存状態であったため、それ以上の土器が連続するテラスの上に献ぜられていたものと推定されることは、驚きを禁じ得ない。残存土器群の特徴は、V章(4)で要記したとおりであるが、①豊富な器種と大小のバラエティー、②特にセット関係を有する小型飲食用器の存在、③播磨以西の山陽地方産とみられる須恵器の存在などが摘記され、上記⑤とも深く関係して、本墳被葬者の出自や性格を暗示させる。一括性の高いこの土器群は、また7世紀の摂津西部地域における土器編年や築造年代を考える上にも有効な基準資料となる。

(7) 城山古墳群の群集墳としての性格

旭塚古墳は、芦屋川右岸、通称城山の山麓部から山腹急斜面にかけて営まれた城山古墳群中の一墳であり、時間的にも空間的にも群集墳を構成していることは疑いない。しかし、城山古墳群は、西に隣接する三条古墳群と並んで様々な点で異質で特異な群集墳の性格を顕示している。それは市域東部の丘陵地一帯に展開する八十塚古墳群などの性格と比較して、より一層明瞭なものとなり、既に素描を図ったところである〔森岡2002、森岡・坂田2009〕。群集墳の形成には、それぞれにプラットフォームとしての地域と母集団があり、その析出を要する。

その第一点目は、その早い成立と終焉の時期の新しいに鑑え、6世紀前半の早々に造墓活動を始め、7世紀後半の天武・持統朝期へと持続する。実年代に於いて少なくとも見積もっても150年前後は継続したもので、群形成の長期に及ぶ経営が注目される。第二点目は、築造された古墳が横穴式石室を内部構造にすることに基調を置きつつも、堅穴系石室や横口式石棚などの諸要素を多分に採り入れ、墳丘の大小、高低、構成墳の主体部構造がきわめて多彩であって、一墳ごとに等質性を排除した個性豊かな独立性の高さを保持している点である。第三点目として注目されるのは、副葬品などにみられるミニチュア甕形土器の特徴的な存在であり、かねてより渡来系の要素の一つとして注目されている。加えて、武器や馬具などの副葬品も周辺にみられる他の群集墳より卓越することが窺え、出土遺物の面でも城山古墳群は三条古墳群と同軌のあり方を示す点が看過できない。

以上、やや散漫なまとめとなったが、旭塚古墳のもつ群集墳中での位相や被葬者のもつ強烈なイメージ、古墳自体が持つ特異性などが浮き彫りにできたと考える。これらのことがらば、発掘担当者としての事実関係と考証の最小限の整序にすぎず、残された課題はあまりにも多い。個別具体的に深化させようべき多岐に亘る問題については、報告書の制約と限界を超えることもあって、考察に立ち入った別稿をいくつか用意する中で明らかにしたい。群集墳というものを従前の因習に縛られることなく、解析していく姿勢が必要だろう。（森岡・坂田）

引用・参考文献目録

- 青木 敬 2004 「横穴式石室と土木技術」『古墳文化』創刊号 國學院大學古墳時代研究会
 青木 敬 2005 「後・終末期古墳の土木技術と横穴式石室－群集墳築造における「畿内と東国」」『東国史論』20 群馬考古学協会
 秋里隆高 1796 『摂津名所図会』(荊原邸)
 明元和子 1991a 「(速報) 芦屋市城山3号墳の発掘調査1」『淡神文化財協会ニュース』14 淡神文化財協会
 明元和子 1991b 「(速報) 芦屋市城山3号墳の発掘調査2」『淡神文化財協会ニュース』15 淡神文化財協会
 浅岡俊夫 1981 『東尾城』『日本城郭大系』12 大阪・兵庫 新人物往來社
 芦屋市役所 1971 『新修芦屋市史』本編
 芦屋市役所 2002 「刻印石の謎を解く－発掘調査からわかる大坂城と芦屋の歴史－」『広報あしや』855
 芦屋市役所 2005 「発掘・発見メモリアル2004－徳川大坂城東六甲採石場の大规模調査を終る 長州藩毛利家の石切丁場跡を確認 岩間町では石材を持ち出すルートなどがみつかる」『広報あしや』908
 芦屋市役所 2007 「芦屋考古学再発見35 郷土地名の考古学08－地名と竜山石と芦屋－」『広報あしや』977
 芦屋市役所 2008a 「芦屋考古学再発見41 古墳発掘断章(1)－夢多き考古少年古岡照－」『広報あしや』991
 芦屋市役所 2008b 「芦屋考古学再発見42 古墳発掘断章(2)－武蔵誠と山芦屋古墳の登場－」『広報あしや』993
 芦屋市役所 2008c 「芦屋考古学再発見43 古墳発掘断章(3)－山芦屋古墳の巨大石室を掘る－」『広報あしや』995
 芦屋市役所 2008d 「芦屋考古学再発見44 古墳発掘断章(4)－行政調査の草分けと熊田種次－」『広報あしや』997
 芦屋市役所 2008e 「一体誰が…謎の丸紋刻印 城山刻印群で見つかった二つの刻印」『広報あしや－文化財特集 考古学が解き明かす芦屋－』1001
 芦屋市埋蔵文化財部 2007 「芦屋市埋蔵文化財部蔵蔵地台帳」(芦屋市文化財調査報告第5集)
 芦屋市教育委員会 1967 「<現地説明会資料>山芦屋古墳発掘調査の概要」
 芦屋市教育委員会 1977 「芦屋の史跡 10. 城山古墳群と山芦屋古墳」『芦屋の生活文化史－民俗と史跡をたずねて』
 芦屋市教育委員会 1980 「<現地説明会資料>城山古墳群発掘調査の成果」
 芦屋市教育委員会 1982 「城山南露遺跡A地点発掘調査現地説明会資料」
 芦屋市教育委員会 1988 「八ノ塚岩々平10号墳現地説明会ノート」
 芦屋市教育委員会 1993 「芦屋市埋蔵文化財部蔵蔵地分布地図 利用の手引き」(芦屋市文化財調査報告第24集)
 芦屋市教育委員会 1997 「観覧の手引き 最新発掘! 考古学からみた芦屋展－'96～'97震災復興調査の成果」
 芦屋市教育委員会 1999 「芦屋発掘断章(第62地点)発掘調査－平成11年度震災復興埋蔵文化財調査－現地説明会ノート」
 芦屋市教育委員会 2001a 「芦屋市埋蔵文化財部蔵蔵地分布地図 利用の手引き」(芦屋市文化財調査報告第40集)
 芦屋市教育委員会 2001b 「『寺』字刻印土器と芦屋発掘断章－第75地点発掘調査の成果から－」(公開展示説明会資料)
 芦屋市教育委員会 2006a 「八ノ塚古墳群現地説明会資料－岩々平文字群45・46号墳の確認結果と第58号墳の発掘調査並びに徳川幕府大坂城岩々平石切丁場・刻印石の調査－」
 芦屋市教育委員会 2006b 「芦屋川水車跡跡地見学会資料－芦屋川水車跡跡と城山古墳群第20号墳の発掘調査成果－」
 芦屋市教育委員会 2007a 「会下山から邪馬台国へ－高地性集落の謎と激動の弥生社会－」(会下山遺跡発掘50周年記念事業記録集)
 芦屋市教育委員会 2007b 「旭塚古墳とその周辺－古墳時代終末期巨石古墳・竜山石検出 確認発掘調査の成果と説明のひととき－」(現地説明会資料)
 芦屋市教育委員会 2007c 「広報あしや考古連載記事にみる芦屋の古代史」
 芦屋市教育委員会 2008 「徳川大坂城東六甲採石場における細川家石切丁場の確認について(報道関係公表資料)」
 芦屋市教育委員会 2009 「広報あしや考古連載記事にみる芦屋の地名と道跡びと」
 芦屋市教育委員会・山芦屋遺跡調査会 1981 「(現地説明会資料) 山芦屋遺跡緊急発掘調査の成果－N・S両地点の縄文・弥生道跡を中心に－」
 芦屋市教育委員会・山芦屋遺跡調査会 1982 「山芦屋遺跡S3地点の発掘調査概要」
 網干善教・直宮憲一・藤原学・森岡秀人 1973 「吉志部古墳発掘調査報告」 吹田市・吹田市教育委員会・関西大学考古学研究室
 天野正史 1971 「八十塚古墳群群葬調査報告と今後の問題」『芦の芽』23 芦の芽グループ
 荒本幸治 編 2006 「木谷谷11号墳発掘調査報告書」(赤徳市文化財調査報告64) 赤徳市教育委員会
 有坂隆徳・村川行弘 1971 「大坂城と芦屋」『新修芦屋市史』本編 芦屋市役所
 伊井孝雄 2004a 「兵庫県芦屋市八十塚古墳群破壊の危機」『文芸協ニュース』166 文化財保存全国協議会
 伊井孝雄 2004b 「新しいタイプの弘明発と道跡調査問題－芦屋市の八十塚古墳群と徳川大坂城採石遺跡」『文芸協ニュース』167 文化財保存全国協議会
 池田 碩 1998 「花崗岩地形の世界」古今書院
 勇 正廣 他 1972 「西宮市埋蔵文化財部蔵蔵地分布地図及び地名表」(文化財資料4) 西宮市教育委員会
 勇 正廣 他 1974 「具足塚－発掘調査概報」(文化財資料10) 西宮市教育委員会
 勇 正廣・藤岡 弘 1976 「古墳時代」『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
 勇 正廣・藤岡 弘・前田義人 1977 「香楽園の古墳－発掘調査概報－」(文化財資料18) 西宮市教育委員会
 勇 正廣・藤岡 弘・前田義人・吉川久雄 1976 「具足塚発掘調査報告」(西宮市文化財調査報告書第1集) 西宮市教育委員会
 勇 正廣・藤岡 弘・森岡秀人 1977 「芦屋市山芦屋古墳(仮称城山古墳)緊急発掘調査終了報告」(芦屋市文化財資料調査報告1) 芦屋市教育委員会

- 石野博信 1970 『宝塚市長尾山古墳群』『宝塚の埋蔵文化財』『宝塚市文化財調査報告第1集』宝塚市教育委員会
 森 浩一 編『論集終末期古墳』1973年に再録所収
 稲田孝司 1978 『忌の甕と王権』『考古学研究』97 (1976年版) 考古学研究会
 今西純朗・森岡秀人 1973 『古墳の歴史的研究—八十塚13号墳をめぐる横穴式石室の二次的使用について—』『八十塚13号墳の測量調査』声の芽グループ考古学研究会・兵庫県立声屋高校史学研究部
 岩本昌三・藤川祐作 1979 『第6章 声屋の史跡19 大坂城と採石地声屋の刻印石』『声屋の生活文化史—民俗と史跡をたずねて—』声屋市教育委員会
 魚澄悠五郎 編 1956 『声屋市史』本編 声屋市教育委員会
 魚澄悠五郎 編 1957 『声屋市史』史料編第二 (考古学資料編) 声屋市教育委員会
 大岡正美 2003 『9. 文政にみる近世初頭の採石場の変遷と意匠・徳川大坂城』『徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ 岩々平刻印石 (第12次) 発掘調査報告書—声屋市文化財調査報告第44集—』声屋市教育委員会
 大坂城天守閣 2002 『特別展 大坂再生—徳川幕府の大坂城再築と都市の復興—』
 大坂城天守閣 編 1984 『大坂城天守閣紀要』12 (大坂城学術調査報告特集号)
 大阪府立近つ飛鳥博物館 編 2006 『年代のものと—陶器の須恵器—』(大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40) 平成17年度
 冬季企画展・重要文化財指定記念
 太田宏明 1999 『「畿内型石室」の属性分析による社会組織の検討』『考古学研究』181 (第46巻第1号) 考古学
 研究会
 太田宏明 2002 『第5章 論考3 類型化による群集墳の検討—西摂地域を中心として—』『八十塚古墳群の研究』
 (関西大学文学部考古学研究 第7冊・声屋市文化財報告第33集) 関西大学考古学研究会 編
 太田宏明 2003a 『畿内型石室の変遷と伝播』『日本考古学』15 日本考古学協会
 太田宏明 2003b 『畿内地域における導入期の横穴式石室』『関西大学考古学研究会開設五拾周年記念考古学論義』
 関西大学
 小方泰宏 1995 『大島1号古墳の復元—後期横穴式石室の築造過程—』『研究紀要』9 財団法人 北九州市教育
 文化事業団 埋蔵文化財調査室
 岡野慶隆 1987 『横穴式石室の平面企画についてⅡ—畿内における主要横穴式石室の検討—』『関西学院考古』8
 関西学院大学考古学研究会
 岡野慶隆 他 1975 『構内古墳現状・遺物報告』『関西学院考古』2 関西学院大学考古学研究会
 岡野慶隆・寺前直人・福永信哉 編 2006 『川西市勝福寺古墳発掘調査報告書』川西市教育委員会
 岡本良一 1970 『大坂城』(岩波新書739) 岩波書店
 岡本良一 編 1983 『大坂城』清文堂
 尾崎善左衛門 1966 『横穴式古墳の研究』吉川弘文館
 落合重信 他 1956 『神戸地方古墳地名表』神戸市教育委員会
 小野 清 1973 『大坂城誌 全』(付・日本城郭誌) (1899年刊行版を復刻) 名著出版
 小野 清 1989 『大坂城誌 中』
 堀原 勝 2001 『江戸の施設と遺構 2 土居・土橋・石垣 石垣の名称と構造』『西説江戸考古学研究事典』(江
 戸遺跡研究会 編) 柏書房
 春日真実 2001 『横穴の製作技法』『つばとのかめのつくり方—須恵器貯蔵具を考えるⅡ—』(北陸古代土器研究)
 9 北陸古代土器研究会
 葛野 豊 2004 『「学問・文化」徳川大坂城の石垣採石跡 声屋市岩々平 調査・保存の意味 兵庫』『赤坂』
 11月25日号 日本共産党
 河上邦彦 1976 『大和の群集墳概観』『横田健一先生還暦記念日本史論叢』横田健一先生還暦記念会
 関西大学文学部考古学研究会 編 1983 『関西大学考古学研究会開設参拾周年記念考古学論義』関西大学文学部考古学研
 究室
 関西大学文学部考古学研究会 編 2002 『八十塚古墳群の研究』(関西大学文学部考古学研究第7冊・声屋市文化財調査報
 告第33集) 関西大学文学部考古学研究会
 喜田貞吉 1922 『古墳墓の二、各地の荒墳』(第3章 武庫地方上代の遺物遺蹟)『神戸市史』別録1 神戸市役所
 北垣聰一郎 1984 『横穴式石室構築技法の一考察』『横原考古学研究論集』6 吉川弘文館
 北垣聰一郎 1987 『石垣普請』法政大学出版局
 北垣聰一郎 2005 『第5章 第3節 近世の石切技術』(兵庫県高砂市所在竜山石切場—竜山採石遺跡詳細分布調査
 報告書—)『高砂市文化財調査報告12』高砂市教育委員会
 北垣聰一郎 2008 『石垣構築技術の発達と石材の規格化』『天下普請大坂城再築を支えた石材の調達—東六甲徳川大
 坂城の石切丁場跡—』大阪歴史学会
 喜谷美宜 1964 『後期古墳時代研究抄』『日本考古学の諸問題』(考古学研究会十周年記念論文集)
 北野博司 2001 『須恵器の風船技法』『つばとのかめのつくり方—須恵器貯蔵具を考えるⅡ—』前掲書
 木下 忠 1962 『後期古墳群の諸問題』『考古学研究』33 考古学研究会
 木下律子・辻 有子・山口厚子・田辺真一・森岡秀人 1974 『(資料紹介) 声屋市立声屋高等学級所蔵の須恵器』『声屋』27 兵
 庫県立声屋高等学校自治会
 熊田種次 1949 『探史日誌』(メモ・ノート遺稿、岩本昌三筆稿)
 車崎正彦 2007 『古墳時代の社会—首長国から国家へ—』『季刊考古学』98 雄山閣
 合田茂伸 2002 『第5章 論考4 横穴式石室の床面について』(1998成稿、2000修正)『八十塚古墳群の研究』
 (関西大学文学部考古学研究 第7冊・声屋市文化財報告第33集) 関西大学考古学研究会 編
 合田茂伸・西川卓志 編 1991 『兵庫県高砂市所在八十塚古墳群調査報告書第2号墳 第2次発掘調査報告書』(文化財資料

- 34) 西宮市教育委員会
『考古小報』 西宮史談會
『堀江古墳発掘調査概要』(調査終了報告、タイプ印刷)
『黄泉戸奥』『古墳文化論考』 平凡社 初出は昭和24(1949)年『考古学集刊』第2冊
『IV. 葬儀論2-須成儀礼』『葬と供養』 東方出版
『問題の所在』『佐良山古墳群の研究』1 津山市
『日本古墳文化』『日本歴史講座』1 歴史学研究会・日本史研究会
『多摩校刻印のゆくえ-刻印は、家紋か?デザインか?』『芦屋市立美術館紀要』創刊号
芦屋市立美術館
『石材の代表『みかげ石』』『自然環境ウォッチング「六甲山」』(兵庫県立人と自然の博物館「六甲」研究グループ 編) 神戸新聞総合出版センター
『VI. 3. 六甲花崗岩の分類研究-特性からみた石垣用材』『徳川大坂城東六甲探石場Ⅲ 岩々平刻印群(第12次)発掘調査報告書-芦屋市六甲探石場水場高区配水池(水道施設)築造工事に伴う唐津藩探石場跡の発掘調査-』(芦屋市文化財調査報告第44集) 芦屋市教育委員会
『地質学・岩石学的にみた六甲山の御影石』『天下普請を支えた石材の調査-東六甲徳川大坂城石切丁跡-』現地検討会資料 主催:大坂歴史学会 後援:日本考古学協会・文化財保存全国協議会・関西文化財保存協議会・歴史資料ネットワーク
『朝日ヶ丘古墳群と八十塚古墳群』『芦屋』18 兵庫県芦屋高校自治会
『芦屋市内古墳分布調査所見』『芦屋市埋蔵文化財(包蔵地台帳 八十塚B号墳発掘調査報告書』(芦屋市文化財調査報告第5集) 芦屋市教育委員会
『須成器類の口縁部接合痕跡』『つばとかめのつくり方-須成器貯蔵具を考えるII-』前掲書
『群集墳の形成とその被葬者について』『考古学雑誌』第58巻第2号 日本考古学会
『新しい群集墳』『古代学評論』(古代を考える 別冊 第5号) 古代を考える会
『寺田遺跡第96地点発掘調査概要報告書 阪神・淡路大震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果』(芦屋市文化財調査報告第32集) 芦屋市教育委員会
『芦屋の里』 宝蔵館
『本邦発見の甕形土器』『歴史と地理』22-5
寒川 旭・森岡秀人・竹村忠洋 2001 『芦屋廃寺跡建築物基壇と関わる地震痕跡』『日本考古学』12 日本考古学協会
志村 清 1970 『大坂城今昔』(日本古城友の会 編) 日本城郭資料出版会
白石太一郎 1966 『畿内の後期大規模集墳に関する一試考-河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として-』『古代学研究』(第42・43合併号) 古代学研究会
白石太一郎 1975 『ことわざし考-横穴式石室墳の埋葬儀礼をめぐる-』『権原考古学研究所論集 創立35周年記念』権原考古学研究所 編 吉川弘文館
『釜と甕形土器の新発見』『考古学雑誌』9-8 日本考古学会
城山古墳群・山形遺跡』(兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度) 兵庫県教育委員会
『群集墳をめぐる諸問題-大和を中心として-』『桜井市外蔵山北麓古墳群』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第34冊) 奈良県埋蔵文化財研究所
『堆積学辞典』 朝倉書店
『芦屋市所在 三条九ノ坪遺跡-被災マンション等再建事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』(兵庫県文化財調査報告書第168冊) 兵庫県教育委員会
『山陽道の駅と駅跡』『古代交通の考古地理』 大明堂
『山陽道-一瓦葺き白壁朱塗りの駅跡』『古代を考える古代道』(木下 良 編) 吉川弘文館
『群集墳からみた地域支配(上)-但馬地域の分析を中心に-』『古代学研究』175 古代学研究会
『群集墳からみた地域支配(下)-但馬地域の分析を中心に-』『古代学研究』176 古代学研究会
『津知遺跡(第198・222地点)発掘調査報告書-芦屋西部第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果-』(芦屋市文化財調査報告第55集) 芦屋市教育委員会
『平成12年度国庫補助事業 城山・三条古墳群C地点発掘調査実施報告書 平成13年(緊急)3月』
『平成11・12年度国庫補助事業 芦屋市内道跡発掘調査-震災復興に伴う埋蔵文化財緊急調査確認-』本発掘調査-実施報告書』(芦屋市文化財調査実施報告書3) 芦屋市教育委員会
『第2章 第1節 城山山麓遺跡(C・D地点)』『平成12年度国庫補助事業 芦屋市内道跡発掘調査概要報告書-震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果-』(芦屋市文化財調査報告第65集) 芦屋市教育委員会
竹村忠洋・白谷朋世 2004 『徳川大坂城東六甲探石場岩々平刻印群の発掘調査(1)-長州藩毛利家石切丁場における発掘調査の成果-』 城郭談話会11月例会資料(2004年11月13日)
竹村忠洋・白谷朋世 2007 『兵庫県芦屋市芦屋川水車跡跡の調査-六甲山山麓における産業用水車遺構の検討-』『有限責任中間法人日本考古学協会第73回総会研究発表要旨』 有限責任中間法人日本考古学協会
竹村忠洋・白谷朋世 編 2006 『徳川大坂城東六甲探石場Ⅴ 岩々平刻印群(第85地点)発掘調査報告書-長州藩毛利家石切丁場における発掘調査の成果-』(芦屋市文化財調査報告第61集) 芦屋市教育委員会
竹村忠洋・白谷朋世 編 2007 『打出小遺跡(第41地点)発掘調査報告書』(芦屋市文化財調査報告第66集) 芦屋市教育委員会
竹村忠洋・白谷朋世 編 2007 『芦屋川水車跡跡発掘調査報告書-城山古墳群第20号墳と芦屋川水車跡跡の発掘調査成果-』(芦屋市文化財調査報告第71集) 芦屋市教育委員会
竹村忠洋・守田めぐみ 編 2009 『月若遺跡発掘調査概要報告書第96地点-都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査

- 「Ⅱ」(芦屋市文化財調査報告第76集) 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 田辺昭三 1966 『陶器古墳誌』Ⅰ 平安学術考古学クラブ
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 田辺真人・森岡秀人 他 1979 『芦屋の生活文化史—民俗と史跡をたずねて—』 芦屋市教育委員会
- 地学団体研究会大阪支部 1999 『大地のおいたち—神戸・大阪・奈良・和歌山の自然と人類』 築地書館
- 築地研究会 2006 『大板城 石垣調査報告書(二)』 日本古城友の会
- 辻 美紀 1999 『古墳時代中・後期の土器に関する一考察』『関東形成期の考古学』 大阪大学考古学研究室
- 辻 康男 2001 『芦屋川・宮川流域沖積扇状地における更新世末期遺構の地形発達史と遺跡形成過程—縄文時代後期—弥生時代前期の堆積環境を中心として—』『第98近江県立県立総合研究発表要旨・資料』
- 辻 康男 2002 『遺跡をとりまく自然環境』『六条遺跡発掘調査報告書—芦屋西部第一地区震災復興土地地区西整理事業・清水公園建設事業に伴う六条遺跡(第17・18地点)の事前調査記録—』(芦屋市文化財調査報告第41集) 芦屋市教育委員会
- 辻 康男 2003 『Ⅱ 1 遺跡をとりまく自然環境』『津知遺跡第142地点ほか発掘調査報告書—芦屋西部第二地区震災復興土地地区西整理事業に伴う震災復興調査の成果—』(芦屋市文化財調査報告第46集) 芦屋市教育委員会
- 辻 康男・森岡秀人・竹村忠洋 2000 『芦屋の縄文遺跡—震災復興調査の成果から—』(第54回京都縄文文化研究会発表資料)
- 辻 康男・森岡秀人・竹村忠洋 2001 『六甲山地南麓における沖積扇状地の階序と考古遺跡の形成過程について—芦屋川・宮川の事例—』(第36回低湿地遺跡研究会発表要旨・資料)
- 寺澤 薫・森岡秀人 編 1990 『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』 木耳社
- 郡田比呂志 1970 『横穴式石室と群衆墳の発生』『古代の日本』5 近畿 角川書店
- 寺前直人 2006 『モモツグイ再考—古墳における飲食と調理の表象としての土器—』『待兼山論叢』40 史学第大阪大学大学院文学研究科
- 富山直人 1994 『横穴式石室考—畿内を中心として—』『大阪市文化財論集』 大阪市文化財協会
- 中野 咲 2005 『土師器窯の地域色発現過程—古墳時代中・後期の近畿地方を中心に—』 三条文化財整理事務所学習会資料
- 仲摩三郎 編 1911 『武庫部郡名・名所旧蹟』西撰大綱 明輝社
- 長町 彰 1928 『摂津山芦屋古墳調査報告』『考古学雑誌』18-11 日本考古学会
- 中村 浩 2001 『和泉陶器 出土須恵器の型式編年』 美香書房出版
- 中村博司 1997 『徳川期大板城石垣築造について』『建設文化としての大板城石垣築造における土木施工技術の土木史的調査研究』(課題番号07455206 平成7・8年度文部省科学研究(施設研究(B))研究成果報告書) 建設文化としての大板城石垣築造に関する総合研究会(研究代表者 天野光三)
- 中村博司 2004 『大板城と石切丁遺跡について』『第9回中国四国中世城館調査検討会—中国の城域にみる石垣普請—』第9回中国四国中世城館調査検討会
- 中村博司 2005 『天下普請—徳川大板城の石垣構築をめぐって—』『天下普請を支えた石材の調達—東六甲徳川大板城石切丁跡—』(現地検討会資料) 主催:大阪歴史学会 前掲書
- 鍋島敏也・藤原 学 1974 『千里古跡群』
- 並河誠所 1734 『摂津志』(日本興地通志叢内部)
- 西 弘海 1986 『土器様式の成立とその背景』『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会 真陽社
- 西川卓志 2000 『八十塚古墳群老松町支群第3号墳の調査』『八十塚古墳群老松町支群第4号墳の調査』『西宮市埋蔵文化財発掘調査報告書』(文化財資料44) 西宮市教育委員会
- 西嶋定生 1961 『古墳と大板城』『関山史学』10
- 西宮市教育委員会 1967 『吾楽園五雲町古墳—移築保存記録—』 西宮市教育委員会
- 西宮市教育委員会 編 1982 『西宮市埋蔵文化財調査分布地図及び地名表』(文化財資料23) 西宮市教育委員会
- 西宮市立郷土資料館 編 1994 『八十塚発掘—38年間にわたる群衆墳発掘調査の成果—』
- 西宮市立郷土資料館 編 1998 『紅野芳雄「考古小録」—西宮考古学のバイオニア—』
- 白谷朋世 編 2006 『八十塚古墳群(第106地点)発掘調査報告書—八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳と徳川大板城東六甲採石場岩ヶ平支群の調査—』(芦屋市文化財調査報告第63集) 芦屋市教育委員会
- 白谷朋世・竹村忠洋・水津真実 2006 『八十塚古墳群(第106地点)発掘調査報告書—八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳と徳川大板城東六甲採石場岩ヶ平支群の調査—』(芦屋市文化財調査報告第63集) 芦屋市教育委員会
- 橋本 久 1971 『御堂ヶ池群衆墳の「列石」について』『畿内野の古墳時代』京都大学考古学研究会
- 橋本 久 1972 『古墳は語る』『宝塚市史』1 宝塚市
- 横野俊一 2003 『2. 歴史的環境と周辺の遺跡』『徳川大板城東六甲採石場Ⅲ 岩ヶ平支群(第12次)発掘調査報告書』(芦屋市文化財調査報告第44集) 芦屋市教育委員会
- 原口正三 1979 『墓の中の須恵器—塚原古墳群の須恵器』『日本の原始美術4 須恵器』講談社
- 兵庫県教育委員会 2000 『山畑古墳群1』(東大阪市文化財調査報告書第1冊) 東大阪市教育委員会
- 兵庫県教育委員会 2004 『兵庫県遺跡地図—第1分冊(発掘調査の手引き・地名表)』
- 兵庫県教育委員会 2004 『兵庫県遺跡地図—第1分冊—(発掘調査の手引き・遺跡地図地名表)』
- 兵庫和雄 1975 『群衆墳研究の一情況—六世紀代政治構造把握への方法論—』『発掘—』『古代研究』7 元興寺弘教民俗資料研究所考古学研究室
- 藤井重夫 1982 『大板城石垣符号について』『大板城の諸研究』(日本城郭史研究叢書8) 名著出版
- 藤井祐介 1976 『旧石器・縄文時代』『新修 芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所

- 藤井祐介・森岡秀人 1974 『朝日ヶ丘縄文遺跡・会下山遺跡』（芦屋市文化財調査報告第8集） 芦屋市教育委員会
- 藤岡 弘 1967 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳 八十塚E号墳発掘調査報告書』（芦屋市文化財調査報告第5集） 芦屋市教育委員会
- 藤岡 弘 1971 『八十塚古墳群詳察調査報告書』 芦屋市教育委員会
- 藤岡 弘 1986 『八十塚古墳群若ヶ平支群（22号墳）』（兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度） 兵庫県教育委員会
- 藤岡 弘・勇 正廣 1978 『山内古墳群』『日本考古学年報』29（1976年版） 日本考古学協会
- 藤岡 弘・橋爪康至 1966 『芦屋市内出土遺物について』『朝日ヶ丘縄文遺跡 八十塚古墳群』（芦屋市文化財調査報告第4集） 芦屋市教育委員会
- 藤岡 弘 他 1967 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳 八十塚E号墳発掘調査報告書』（芦屋市文化財調査報告第5集） 芦屋市教育委員会
- 藤岡 弘・森岡秀人 1980 『城山古墳群緊急発掘調査概報』（芦屋市文化財調査連絡調査No.8） 芦屋市教育委員会
- 藤川祐作 1969 『大坂築城石と芦屋』『芦の芽』16 芦の芽グループ（孔版）
- 藤川祐作 1972 『摂津大坂城（六）-芦屋山中の採石場-』（城と陣屋）65 日本古城友の会
- 藤川祐作 1976 『八十ヶ所印群の復元-徳川大坂城の研究3』『わだち』12 わだち編集部（孔版）
- 藤川祐作 1979 『採石場としての若ヶ平』『兵庫県埋蔵文化財調査集報』4 兵庫県教育委員会
- 藤川祐作 1985a 『徳川大坂城・東六甲採石場の西限の再考』『郷土史料室だより』85夏・より号 芦屋市教育委員会
- 藤川祐作 1985b 『大坂城と採石場』『鹿児』111 加古川史学会
- 藤川祐作 1985c 『摂津大坂城（十）-徳川大坂城東六甲採石場甲山削印群-』（城と陣屋）168 日本古城友の会
- 藤川祐作 1991 『六甲山系の徳川大坂城採石場と積み出し地-芦屋市呉川町発見の新資料を中心に-』『歴史と神戸』168 神戸史学会
- 福原清次郎 1904 『摂津国武庫郡打出村の古墳』『考古界』5 日本考古学会
- 古川久雄 1975 『八十塚古墳群における呼称統一の一試案』『八十塚12・15号墳の調査』六甲南麓群集墳調査調査団
- 古川久雄 1975 『芦屋市内出土古墳時代関係遺跡遺物調査報告（I）』（市史編集作業プリント） 芦屋市史編集室
- 古川久雄 1976a 『市内出土の古墳時代遺物』『新修芦屋市史』資料編1 芦屋市役所
- 古川久雄 1976b 『芦屋市打出跡塚古墳について』『武陽史学』15 武陽史学会
- 古川久雄 1977 『朝日ヶ丘町257番地の原器器出土地について』『芦の芽』30 芦の芽グループ
- 古川久雄 1988 『徳川大坂城の採石場』『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図・利用の手引き』（芦屋市文化財調査報告第16集） 芦屋市教育委員会
- 古川久雄 1990 『芦屋市八十塚古墳群若ヶ平支群第10号墳の調査-古墳損壊に伴う確認調査の結果-』（芦屋市文化財調査報告第20集） 芦屋市教育委員会
- 古川久雄 1992 『若ヶ平削印群における池田家華道家老人名削印の発見』『葎橋』65 芦の芽グループ
- 古川久雄 1993 『徳川大坂城東六甲採石場-調査研究25年の歩みと課題』（考古学研究会関西例会第65回研究会発表資料） 考古学研究会
- 古川久雄 2003 『若ヶ平削印群における採石大名と採石領域』『徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ若ヶ平削印群（第12次）発掘調査報告書-芦屋市六蔵江浄水場高区配水池（水道施設）築造工事に伴う葎津港採石場跡の発掘調査-』（芦屋市文化財調査報告第44集） 芦屋市教育委員会
- 古川久雄 2004 『徳川大坂城と東六甲採石場』『第9回中国四国中世城館調査検討会-中国の城郭にみる石垣管轄-』第9回中国四国中世城館調査検討会
- 古川久雄・森岡秀人・濱野俊一 他 2003 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ 若ヶ平削印群（第12次）発掘調査報告書-芦屋市六蔵江浄水場高区配水池（水道施設）築造工事に伴う葎津港採石場跡の発掘調査-』（芦屋市文化財調査報告第44集） 芦屋市教育委員会
- 古川久雄 編 1990 『芦屋市八十塚古墳群若ヶ平支群第10号墳の調査-古墳損壊に伴う確認調査の結果-』（芦屋市文化財調査報告第20集） 芦屋市教育委員会
- 古川久雄 編 1999 『兵庫県芦屋市・西宮市所在 若ヶ平削印群 削印石資料集』 葎橋文化財研究所
- 古川久雄 編 2002 『徳川大坂城東六甲採石場と若ヶ平削印群』『平成13年度国庫補助事業 徳川大坂城東六甲採石場Ⅱ 若ヶ平削印群（第11次）発掘調査報告書』（芦屋市文化財調査報告第42集） 芦屋市教育委員会
- 織川道草 1963 『芦屋郷土史』 芦屋史談会
- 前田 昇 1971 『第一章 芦屋の自然環境』『新修 芦屋市史』本篇 芦屋市役所
- 前田義人 1974 『苦楽園5・6・7・8号墳』『西宮の文化財-埋蔵文化財編-』（文化財資料7） 西宮市教育委員会
- 水野正好 1974 『群衆墳の群衆造とその性格-兵庫東小野市所在東野中帯地区古墳群をめぐる分析-』『高山古墳群調査報告書』（小野市文化財調査報告書第6冊） 小野市教育委員会
- 水野正好 1974 『雲雀山東尾根中古墳群の群衆造とその性格』『古代研究』4（特集・群衆墳研究） 元興寺弘教民俗資料研究所考古学研究室
- 南 博史 編 1985 『寺田遺跡発掘調査報告書』 財団法人 古代学協会
- 武庫川女子大学考古学研究会 1984 『兵庫県芦屋市 旭塚古墳-表六甲城山群集墳中の一巨石墳の調査とその考証-』 武庫郡教育会 編 1921 『武庫郡誌』 武庫郡教育会
- 武庫 誠 1956 『遺跡・遺物から見た古代の芦屋地方』『芦屋市史』本篇 芦屋市教育委員会
- 武庫 誠 1977 『山内古墳群発掘調査の概要』（現地説明会資料） 芦屋市教育委員会
- 武庫 誠・村川行弘 1971 『考古学上からみた芦屋』『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所

- 武藤 誠・森岡秀人・上田祥子 1976 「文献解題 吉岡昭とその遺稿について」『新修芦屋市史』資料編1 芦屋市役所
- 武藤 誠 編 1971 「新修 芦屋市史」本編 芦屋市役所
- 武藤 誠 編 1978 「館谷文群（2号墳）」『吉岡昭の古墳』〈西宮市文化財調査報告第2集〉 西宮市教育委員会
- 村上欣三 1905 「摂津国打出村の古墳」『考古界』8-2 日本考古学会
- 村上 隆 2001 「古代金貨の材質と製作技術の歴史的変遷に関する材料科学研究」『2001年度 文部省科学研究費助成研究』奈良文化財研究所
- 村上越祐 1978 「兵庫縣（動向）」『日本考古学年報』29（1976年版） 日本考古学協会
- 村川行弘 1959 「芦屋市史録」（芦屋市文化財調査報告第1集） 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1962 「大坂城と芦屋」（芦屋市文化財調査報告第2集） 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1966a 「朝日ヶ丘古墳」「八十塚古墳群」「朝日ヶ丘上器遺跡」「朝日ヶ丘縄文前期単純遺跡」「朝日ヶ丘古墳・八十塚古墳群」（芦屋市文化財調査報告第4集） 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1966b 「御谷1号墳」（芦屋市文化財調査報告第4集） 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1966c 「最近発見された遺物・遺跡」（芦屋市文化財調査報告第4集） 前掲書
- 村川行弘 1966d 「吉楽園五番町古墳」（文化財資料3） 西宮市教育委員会
- 村川行弘 1966e 「朝日ヶ丘上器遺跡」「朝日ヶ丘縄文前期単純遺跡」「朝日ヶ丘古墳・八十塚古墳群」（芦屋市文化財調査報告第4集） 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1967 「芦屋市和蔵文化財伝蔵地古墳 八十塚B号墳発掘調査報告書」（芦屋市文化財調査報告書第3集） 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1970a 「現存大坂城の石垣刻印」『大坂城の謎』 学生社
- 村川行弘 1970b 「大坂城の謎」 学生社 前掲書
- 村川行弘 1970c 「芦屋跡寺址」（芦屋市文化財調査報告第7集） 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1971 「考古学上からみた芦屋」『新修芦屋市史』本編 芦屋市役所
- 村川行弘 1979 「親王塚・親王寺所蔵遺物の再検討」『考古学雑誌』第65巻 第3号 日本考古学会
- 村川行弘 2002 「大坂城の謎」（改訂新版） 学生社
- 村川行弘・石野博信 1964 「会下山遺跡」（芦屋市文化財調査報告第3集） 芦屋市教育委員会
- 村川行弘・石野博信・森岡秀人 1985 「増補・会下山遺跡」 明新社
- 村川行弘・森岡秀人 1976 「弥生時代」『新修芦屋市史』資料編1 芦屋市役所
- 望月精司 2001 「須恵器の製作痕跡と成形方法」『つぼとのかめのかつり方ー須恵器貯蔵具を考えるⅡー』 前掲書
- 森 浩一 1962 「後期古墳の討論を回顧して」『古代学研究』30（特集後期古墳の研究） 古代学研究会
- 森岡秀人 1972 「考察とまとめ」『八十塚14号墳の測量調査』 芦の芽グループ考古学研究会・兵庫県立芦屋高校史学研究部
- 森岡秀人 1973 「向こうの山に群がる黄泉國一六平南麓群集墳解明への一素描」『芦の芽』24 芦の芽グループ
- 森岡秀人 1974a 「山崎山古墳墳丘実測調査の結果概要報告」 芦屋市史編集室
- 森岡秀人 1974b 「八十塚B号墳緊急発掘調査の結果概要」〔プリント〕 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1976 「阪城山古墳子寮調査概要報告」 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1977a 「(書評) 関西学院考古学3-西摂地域群集墳解明への一布石」『芦屋』15 芦の芽グループ
- 森岡秀人 1977b 「(研究ノート) TK217型式における地方第2次拡散と群集墳の追跡ー芦屋八十塚古墳群出土須恵器製作地の再検討ー」『わだち』14 兵庫県立芦屋高校史学研究部OB会
- 森岡秀人 1977c 「山崎山古墳緊急発掘調査の概要ー白江邸西側新築工事に伴う事前調査ー」『芦屋市文化財資料(1977) 遺跡調査No.4』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1977d 「芦屋市山崎山古墳（阪城山古墳）緊急発掘調査終了報告」『芦屋市文化財資料(1977) 遺跡調査No.1』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1977e 「貴重な資料を発掘ー山崎山古墳・埋蔵文化財発掘調査の記録」『広報あしや』5月号 芦屋市役所
- 森岡秀人 1978a 「芦屋市八十塚6・7・8号墳所在地開発に伴う子寮調査結果の概要」〔芦屋市文化財資料(1978) 遺跡調査No.1〕 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1978b 「〈資料紹介〉山崎山古墳隣接地出土の須恵器」『あしや文化財短報』創刊号 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1979a 「解明進む八十塚古墳群（芦屋遺跡めぐり5）」『海技通信』340 海技大高校
- 森岡秀人 1979b 「Ⅱ 調査研究の沿革」『Ⅱ 総括ー八十塚古墳群の展開と岩ヶ平文群のもつ意義ー』『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平文群の調査』〔芦屋市文化財報告第11集〕 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1979c 「城山古墳群と山崎山古墳」『芦屋の生活文化史ー民俗と史跡をたずねてー』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1980 「芦屋遺跡めぐり(9)山崎山古墳の出現ー巨石墳の系譜を求めてー」『海技通信』344 海技大高校
- 森岡秀人 1981a 「東六甲の高地性集落（上）」『古代学研究』96 古代学研究会
- 森岡秀人 1981b 「西摂の縄文文化展ー表六甲の先住者の生活を探るー」 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1982a 「阪神地方 その過疎時代ー西摂の縄文文化展に寄せてー」『地域史研究 芦の芽』35 芦の芽グループ
- 森岡秀人 1982b 「城山南麓遺跡A地点確認調査報告書ー芦屋市山崎山町・見島部建設予定地の埋蔵文化財子寮調査結果の概要ー」 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1982c 「城山古墳群第4・10号墳緊急発掘調査」『昭和55年度 兵庫県埋蔵文化財調査年報』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1982d 「山崎山遺跡N地点緊急発掘調査」『昭和55年度 兵庫県埋蔵文化財調査年報』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1982e 「山崎山遺跡S1地点緊急発掘」『昭和55年度 兵庫県埋蔵文化財調査年報』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1983a 「城山南麓遺跡B地点緊急発掘調査の概要ー城山17号墳の発掘と中世建物群の部分確認ー」 芦屋市教育委員会

- 森岡秀人 1983b 「道跡と柵形配置—後半期横穴式石室墳の空間利用原理をめぐって、三の考察—」『関西大学考古学研究所開設50周年記念考古学論叢』 関西大学文学部考古学研究室
- 森岡秀人 1984a 「八十塚古墳群岩ヶ平支群第23・24・25・29号墳」『兵庫県歴史文化財調査年報 昭和56年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1984b 「表六甲東南部における群集墳の動向」『歴史と神戸』第23巻第4号 神戸史学会
- 森岡秀人 1984c 「旭塚古墳および城山・三条古墳群をめぐって」『兵庫県芦屋市 旭塚古墳—表六甲城山群集墳中の一石室の調査調査とその考証—』 武庫川女子大学考古学研究会
- 森岡秀人 1985a 「城山南麓遺跡A地点」『兵庫県歴史文化財調査年報 昭和57年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1985b 「山芦屋遺跡（S3地点）」『兵庫県歴史文化財調査年報 昭和57年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1986a 「城山古墳群第17号墳」『兵庫県歴史文化財調査年報 昭和58年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1986b 「三条古墳群」『兵庫県歴史文化財調査年報 昭和58年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1986c 「三条寺ノ内B墳所在推定地」『兵庫県歴史文化財調査年報 昭和58年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1986d 「城山古墳群第4・10号墳（山芦屋町19番地1・7・8）」『歴史文化財調査メモリアル'80~'85』 芦屋市文化財調査報告第14集 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986e 「山芦屋遺跡S3地点（山芦屋町58番地）」『歴史文化財調査メモリアル'80~'85』 芦屋市文化財調査報告第14集 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986f 「城山南麓A地点遺跡（山芦屋町6番地8）」『歴史文化財調査メモリアル'80~'85』 芦屋市文化財調査報告第14集 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986g 「城山南麓B地点遺跡（山芦屋町4・5・6番地）」『歴史文化財調査メモリアル'80~'85』 芦屋市文化財調査報告第14集 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986h 「近年の歴史文化財調査・立合調査一覧」『歴史文化財調査メモリアル'80~'85』 芦屋市文化財調査報告第14集 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1987a 「古墳時代の芦屋地方（上）—近年の遺跡調査をふりかえって—」『兵庫県の歴史』23 兵庫県
- 森岡秀人 1987b 「山芦屋遺跡（E1地点）」『兵庫県歴史文化財調査年報 昭和59年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1988a 「古墳時代の芦屋地方（下）—近年の遺跡調査をふりかえって—」『兵庫県の歴史』24 兵庫県
- 森岡秀人 1988b 「兵庫県芦屋市」『角川 日本地名大辞典』28 角川書店
- 森岡秀人 1988c 「三条寺ノ内A・B墳」『兵庫県歴史文化財調査年報 昭和60年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1988d 「三条古墳群（南線）」『兵庫県歴史文化財調査年報 昭和60年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1990a 「V. (3) トレンチ調査の所見」『芦屋市八十八塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳の調査—古墳損壊に伴う確認調査結果—』 芦屋市文化財調査報告第20集 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1990b 「1980—1990年 この10年の文化財保護行政」『芦屋市教育委員会40周年記念誌』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1992 「群集墳の形成」『古代を考える 古墳』（白石太一郎 編）吉川弘文館
- 森岡秀人 1995 「海辺の古墳—摂津・金津山古墳と打出小古墳について—」『古墳文化とその伝統—西谷敦治先生古稀記念論文集』 勉誠社
- 森岡秀人 1996 「8. 山芦屋遺跡」『平成7年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書』 芦屋市文化財調査報告第27集 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2001 「摂津国東原部東原部・賀美郷考証見書」『考古学論叢』5 考古学を学ぶ会
- 森岡秀人 2002 「摂津・八十塚古墳群と美原郡東原部・賀美郷周辺の古代史」『八十塚古墳群の研究』 関西大学文学部考古学研究室第7冊・芦屋市文化財調査報告第33集 関西大学文学部考古学研究室・芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2003 「徳川氏再建大坂城の石切り丁場の調査と保護—芦屋市の行政的取り組みと成果を中心にして—」『石垣吉清の風景を巡る—城の石垣はいかにして築かれたか—』 東北芸術工科大学
- 森岡秀人 2005a 「石切り丁場の出現—徳川大坂城・芦屋市東六甲石切場の発掘調査から—」『国際シンポジウム 徳川の倭城と大坂城—西国大名は倭城築造から何を学んだか？—』 倭城・大坂城国際シンポジウム実行委員会
- 森岡秀人 2005b 「六甲花崗岩巨石の大量利用と徳川大坂城の再築をめぐって」『関西近世考古学研究会—石から見た近世文化—』 資料集 関西近世考古学研究会
- 森岡秀人 2007a 「飛鳥時代の終末期古墳、尾馬城間遺跡、および草部地性遺跡」『平成12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書—震災復興に伴う歴史文化財発掘調査の成果—』 芦屋市文化財調査報告第65集 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2007b 「斎庭野家と古代山陽道経路説をめぐっての一考察」『考古学論叢—小笠原好彦先生退任記念論—』 真陽社
- 森岡秀人 2008 「第1章 考古学が語る本庄地区周辺の地域史」『本庄村史 歴史編—神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみ—』 本庄村史編纂委員会
- 森岡秀人 2009 「六甲山地南麓地域の終末期古墳—周辺施設に竜山石を用いた旭塚古墳の調査報告—」 古代学研究会10月例会（2009年10月17日）発表資料
- 森岡秀人 編 1979 「三条岡山遺跡」『芦屋市文化財調査報告第10集』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1980 「芦屋市歴史文化財遺跡分布地図及び地名表（第1分冊）」『芦屋市文化財調査報告第12集』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1983 「八十塚古墳群の発掘調査概報—岩ヶ平支群F小支群地区の緊急調査成果概要—」『芦屋市文化財調査報告第13集』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1984 「3 八十塚古墳群岩ヶ平支群第23・24・25・29号墳」『兵庫県歴史文化財調査年報 昭和56年度』

- 兵庫県教育委員会
森岡秀人 編 1985 「八十塚古墳群岩ヶ平第6・7・8号墳」『埋蔵文化財メモリアル'80~'85』(芦屋市文化財調査報告第14集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1993 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図および利用の手引き』(芦屋市文化財調査報告第24集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1998 『徳川大坂城東六甲探石場Ⅰー芦屋墓園拡張工事に伴う奥山刻印群K地区内の事前発掘調査ー』(芦屋市文化財調査報告第31集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 2004 『前田公園建設事業に伴う前田遺跡(第20地点)発掘調査概要報告書ー弥生前期水田跡の構造と水利跡ー』(芦屋市文化財調査報告第52集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 他 1973a 『八十塚13号墳発掘調査略報 六甲南麓群集墳測量調査団(芦の芽グループ・兵庫県立芦屋高校)』
森岡秀人 他 1973b 『八十塚13号墳の測量調査ー概要報告ー』(六甲南麓群集墳測量調査第2報 六甲南麓群集墳測量調査団(芦の芽グループ・兵庫県立芦屋高校))
- 森岡秀人 他 1977a 『芦屋市山戸塚古墳(板城山古墳)緊急発掘調査終了報告』(芦屋市文化財資料(1977)遺跡調査No.1) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 他 1977b 『貴重な資料を発掘ー山戸塚古墳・埋蔵文化財発掘調査の記録』(広報あしや)5月号 芦屋市役所
- 森岡秀人・坂田典彦 2004 『津知遺跡(第181地点)発掘調査報告書ー共同住宅建設事業に伴う遺跡西部の様相把握ー』(芦屋市文化財調査報告第50集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・坂田典彦 2005a 『IV. 調査のまとめ』『若宮遺跡(第42地点)発掘調査報告書ー須置器集中遺存地点の調査と成果』(芦屋市文化財報告第38集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・坂田典彦 2005b 『城郭研究の一視点ー徳川大坂城東六甲探石場の発掘調査からー』(日本考古学協会第71回総会研究発表要旨) 日本考古学協会
- 森岡秀人・坂田典彦 2005c 『徳川大坂城東六甲探石場Ⅳ 岩ヶ平石切場跡ー宅地造成工事に伴う埋蔵文化財事前調査の記録と成果ー』(芦屋市文化財調査報告第60集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・坂田典彦 2008 『芦屋市旭塚古墳の調査成果ー多角形墳・甕山石・内部構造が明らかになった終末期古墳ー』『古代文化』59-IV 古代学協会
- 森岡秀人・坂田典彦 2009 『摂津における終末期古墳の一様相ー旭塚古墳の分析を中心にー』『有限責任中間法人日本考古学協会第75回総会研究発表要旨』有限責任中間法人日本考古学協会
- 森岡秀人・田口孝久 1991 『芦屋の歴史と文化財ー歴史資料展示室常設展示図録ー』芦屋市立美術館
- 森岡秀人・竹村忠洋 2000 『阪神・淡路大震災に伴う埋蔵文化財被災復興調査の経過と課題ー芦屋市における5年間をふりかえってー』『地震災害と考古学Ⅰー阪神・淡路大震災の被災状況と復興への取り組みー』日本考古学協会阪神・淡路大震災埋蔵文化財対策特別委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2005a 『19. 八十塚古墳群第30号墳』『平成9・10年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査ー震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査ー実績報告書』(芦屋市文化財調査実績報告書2) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2005b 『12. 城山・三条古墳群』『平成9・10年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査ー震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本調査ー実績報告書』(芦屋市文化財調査実績報告書2) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦 2006 『第4章 第5節 岩ヶ平刻印群(第70地点)の調査』『岩ヶ平刻印群発掘調査報告書第32・33・45・67・70・79・81・91地点ー平成9・11・14・15・16年度国庫補助事業ー』徳川大坂城東六甲探石場Ⅵ(芦屋市文化財調査報告第64集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 編 2001 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』(芦屋市文化財調査報告第40集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・白谷朝世 編 1992 『平成3年度国庫補助事業 芦屋庵寺遺跡ほか発掘調査概要報告書 月若遺跡第12次地点月若遺跡第14次地点 八十塚古墳群岩ヶ平支群第50号墳』(芦屋市文化財調査報告第22集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・藤岡 弘 1980 『城山古墳群緊急発掘調査概報』(芦屋市文化財調査遺跡調査No.8) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・藤川祐作 1980 『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表(第1分冊)』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・藤川祐作 2005 『石切丁場の考古学ー徳川期大坂城東六甲探石場の分析からー』(考古学研究会第137回関西例会発表資料) 考古学研究会
- 森岡秀人・藤川祐作 2008 『矢穴の型式学』『古代学研究』180 古代学研究会
- 森岡秀人・藤田和郎 1984 『兵庫県東部ー西摂地方ー』『古代学研究』104 特集:各地域における最後の前方後円墳(西日本Ⅲ) 古代学研究会
- 森岡秀人・古川久雄 1992 『芦屋市立美術館野外地史資料展示における近世考古資料の一例ー兵庫縣芦屋市沢川町出土の大坂城再興関係石材についてー』『刊版』(関西大学博物館学課程創立三十周年記念特集) 関西大学
- 森岡秀人・古川久雄 1998 『徳川大坂城東六甲探石場Ⅰー芦屋墓園拡張工事に伴う奥山刻印群K地区内の事前発掘調査ー』(芦屋市文化財調査報告第31集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・古川久雄 2002 『平成13年度国庫補助事業 徳川大坂城東六甲探石場Ⅱ 岩ヶ平刻印群(第11次)発掘調査報告書』(芦屋市文化財調査報告第42集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・古川久雄 編 1979 『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』(芦屋市文化財調査報告第11集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・古川久雄 他 編 1979 『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』『兵庫縣埋蔵文化財調査集報』4 兵庫縣教育委員会
- 森岡秀人・村川義典 1986 『三条岡山遺跡(第5次調査)(三条町238番地)』『埋蔵文化財調査メモリアル'80~'85』(芦屋市

- 文化財調査報告第14集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・村川義典 1996 「第6章 摂津国」『兵庫県の考古学』 吉川弘文館
- 森岡秀人・和田秀寿・田口泰久 1991 「芦屋の歴史と文化財——歴史資料展示室常設展示図録——」 芦屋市立美術館
- 森岡秀人・和田秀寿・吉川久雄 他 1990 「芦屋市八十塚岩ヶ平支群第10号墳の調査—古墳損壊に伴う確認調査結果—」
(芦屋市文化財調査報告第20集) 芦屋市教育委員会
- 山芦屋遺跡発掘調査団 1981 「山芦屋遺跡(S2地点)の発掘調査の概要」
- 山本圭二 2001 「埋蔵調査 6 東山古墳群における鉄釘・棺金具と木棺」『東山古墳群Ⅱ』 多可郡中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室 編
- 吉岡 昭 1944a 「摂津国芦屋郡土石器時代文化研究」(和綴墨書)
- 吉岡 昭 1944b 遺稿 「考古簡録」(和綴墨書)
- 吉田宣夫・金森安孝 1997 「桑平遺跡(第31地点)」『平成8年度 年報』 兵庫県教育委員会
- 渡邊邦雄 1996a 「横穴式石室の前庭部構造と墓前祭祀」『ひょうご考古』2 兵庫県考古研究会
- 渡邊邦雄 1996b 「横穴式石室における墓前祭祀」『ひょうご考古』5 兵庫県考古研究会
- 渡邊邦雄 2001 「横穴式石室施設考—墳丘内暗渠と墳丘内列石を中心として—」『古代文化』第33巻第8号 財団法人古代学協会
- 渡邊邦雄 2002 「横穴式石室前庭部における祭祀施設」『古代文化』第54巻第2号 財団法人古代学協会
- 渡邊邦雄 他 1992 「神戸市東灘区生駒古墳調査報告—六甲東南麓地域の終末期古墳の測量調査と後期古墳研究動向—」(神戸大学考古学研究会調査報告第2集) 神戸大学考古学研究会
- 渡辺 昇 編 2003 「芦屋市 六条遺跡—芦屋市西部第一地区震災復興土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書—」
(兵庫県文化財調査報告第256冊) 兵庫県教育委員会
- 和田晴吉 2002 「石切場」『日本考古学事典』(編集代表 田中琢・佐原真) 三省堂
- 和田秀寿 1984 「く写真速報」芦屋市城山17号墳の調査と破壊」『芦の芽』36 芦の芽グループ

図 版

P L A T E

[遺 構]





解体前の旭化成社宅と城山（南から）



解体前の旭化成社宅と発掘前の旭塚古墳（南から）



調査前の事業地の現状（南から）



調査前の事業地の現状（南西から）



第1次確認調査前の状況（調査地北東端・北西から）



トレンチ1と旭塚古墳 遠景（北西から）



トレンチ1 旭塚古墳・墳丘部石列検出状況（北西から）



トレンチ1 旭塚古墳・墳丘部北東壁土層断面（南西から）



トレンチ2 東端・遺物出土状況（北東から）



トレンチ3 表土除去後の状況（北東から）



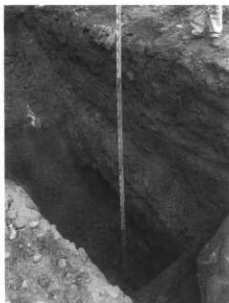
トレンチ4 表土・盛土除去後の状況（南西から）



トレンチ5 完掘状況（南から）



トレンチ 6 完掘状況 (東から)



トレンチ 6
基礎床の確認状況
(GL-3.2m~3.4m
で地山検出)



トレンチ 7 完掘状況東・南壁断面 (西から)



トレンチ 8 完掘状況北西壁断面 (南西から)



トレンチ 9 完掘状況 (東から)



トレンチ10 完掘状況東壁断面 (北西から)



トレンチ11 北壁土層断面 (南西から)



第1次確認調査地中央部の埋め戻し状況 (西から)



第2次確認調査前の状況（北西から）



調査区機械掘削の状況（北西から）



Aトレンチ 人力掘削開始風景（北から）



Aトレンチ 遠景（南西から）



2層上面精査状況（西から）



Aトレンチ 深掘部2段目掘削状況(南東から)



Aトレンチ 北域 礫出土状況(南東から)



Aトレンチ 2層上面精査状況(北から)



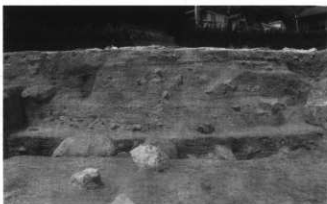
Aトレンチ 北半部 礫出土状況(南西から)



Aトレンチ 機械掘削後の精査面(北東から)



A トレンチ 南半部と拡張部 曝出土状況 (南から)



A トレンチ 北壁土層断面 (1段目)



A トレンチ 北半部 土層断面 (南東から)



A トレンチ 北半部 2層下面曝出土状況 (北西から)



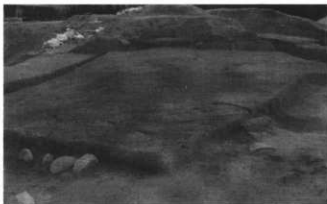
A トレンチ 北半部 2層下面曝出土状況 (北西から)



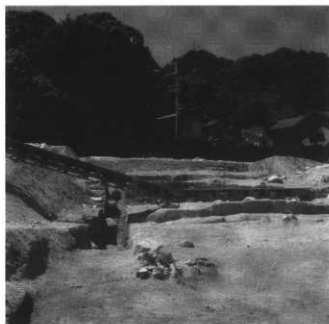
A トレンチ 南端部 完掘状況 (南東から)



A トレンチ 南半部 遺物出土状況俯瞰 (北東から)



A トレンチ 南端部 遺物検出状況 (東から)



Aトレンチ 土器溜りA 遺物検出状況(南から)



Aトレンチ 南半部 遺物出土状況俯瞰(北東から)



Aトレンチ 土器溜りAと拡張部の状況(東から)



Aトレンチ 土器溜りA 遺物検出状況(北西から)



Aトレンチ 土器溜りA 土器取り上げ後の状況(東から)



Aトレンチ 土器溜りA 土器取り上げ状況(南東から)



Aトレンチ 土器溜りA 土器取り上げ後の状況(西から)



Aトレンチ 土器溜りAと完形土器検出状況(北東から)



Aトレンチ 南半部 遺物出土状況



Aトレンチ 溝201完形土器検出状況俯瞰(南東から)



Aトレンチ 溝201完形土器検出状況(北東から)



Aトレンチ 溝201完形土器検出状況(南から)



Aトレンチ 溝201完形土器出土地遠景(北東から)



Aトレンチ 溝201検出状況俯瞰(北西から)



Aトレンチ 溝201検出状況(北東から)



Aトレンチ 溝201完掘状況（北から）



Aトレンチ 溝201完掘状況（北東から）



Aトレンチ 分割掘削の状況（北東から）



Aトレンチ 完形土器完掘状況（南東から）



Aトレンチ 完形土器完掘状況（南東から）



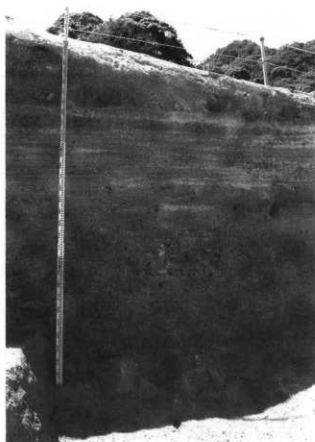
Aトレンチ 完形土器完掘状況（東から）



Aトレンチ 拡張部 北西壁 (旧旭化成社宅掘形断面)



Aトレンチ 拡張部 北西壁 (旧旭化成社宅掘形断面)



Aトレンチ 拡張部 北西壁 (旧旭化成社宅掘形断面)



Aトレンチ 溝201セクション断面 (西から)



Aトレンチ 完掘状況俯瞰 (北西から)



Aトレンチ 深掘部 北西壁土層断面 (東から)



旭塚古墳俯瞰（北西から）



調査前の墳丘（南東から）



墳丘列石出土状況（北から）



墳丘列石出土状況（北西から）



墳丘トレンチ設定状況（西から）



墳丘トレンチ設定状況（北西から）



第1トレンチにみる盛土の状況（南東から）



第1トレンチ奥壁裏込め部の攪乱（北東から）



第1トレンチ東壁土層断面と近世遺構（西から）



第2トレンチ掘削状況（東から）



第2トレンチ南壁土層断面（北から）



第2トレンチ南壁土層断面（北から）



第3トレンチ掘削状況（西から）



第5トレンチ掘削状況（南から）



第3トレンチ掘削状況（西から）



第3トレンチ完掘状況（西から）



近世遺構と墳丘内列石（北から）



コッパ溜りと墳丘内列石（北西から）



コッパ溜りと墳丘内列石（西から）



墳丘内列石（北から）



墳丘南西部の掘削状況（南から）



墳丘盛土の検出状況（北東から）



調査前の状況（南東から）



除草後の状況（南東から）



調査前の状況（北西から）



後補石材除去後の状況（南東から）



調査前の状況（右側壁）



調査前の状況（南東から）



羨道部床面の半截状況（北東から）



床面の半截状況（北西隅から）



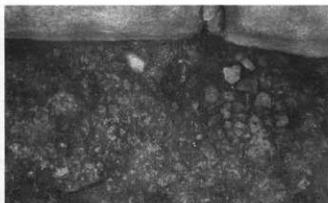
床面の半截状況（北西から）



玄室部床面の半截状況（南東から）



羨道部床面遺物検出状況（竜山石敷布面）



羨道部床面遺物検出状況（竜山石敷布面）



腐植土除去後の石室床面状況（南東から）



石室床面主軸トレンチ掘削状況（南東から）



玄室部胴木痕検出状況（左側壁から）



↑玄室床面（玄門から）



←玄室奥壁と床石、詰石除去状況
（真上から）



奥壁裏込めの状況（東から）



左側壁の裏込め部（北から）



調査前の多角部と外護列石風に積まれた後補石材（南から）



表土除去後の墳丘遺存状況（南西から）



多角部裾とテラス面の状況（南西から）



多角部裾と掘削前のテラス面の状況（西から）



基底列石とテラス面検出状況（南東から）



貼石の崩壊状況とテラス面の
土器出土状況（西から）



テラス面出土の土器群（南から）



テラス面出土の土器群（西から）



テラス面出土の土器群（西から）



テラス面出土の土器群（南から）



テラス面出土の土器群（南東から）



テラス面出土の土器群（東から）



墳丘・列石・供獻土器除去後断割、テラス面完掘後の状況（西から）



前庭部調査区設定状況（南東から）



前庭部調査区掘削状況近景（北、墳丘側から）



碎石層除去後の状況（南東から）



西Ⅱ・Ⅲ区 表土除去後の状況（南西から）



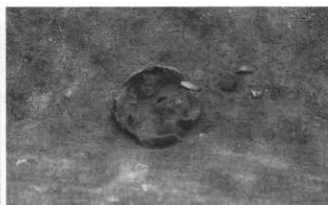
西Ⅰ～Ⅲ区・東Ⅰ～Ⅲ区の掘削状況（北西から）



東Ⅳ区中央 土器出土状況（南から）



東Ⅳ区東端 土器出土状況（南から）



東Ⅳ区 土器器壁検出状況（北から）



西Ⅳ区 亀山石敷布面検出状況（南から）



西Ⅳ区 亀山石敷布面検出状況（南東から）



西Ⅳ区 亀山石敷布面接写（西から）



西Ⅳ区 亀山石敷布面（東から）



西Ⅳ区 亀山石検出状況（北から）



西Ⅲ・Ⅳ区 亀山石敷布面分割調査セッションベルト設定状況（北から）



西Ⅲ・Ⅳ区 亀山石敷布面除石後完掘状況（東から）



主軸トレンチ最終断割（開口部から前庭部を望む）



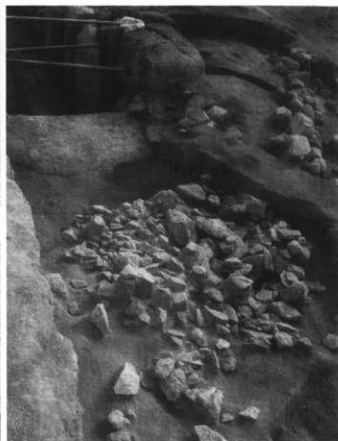
主軸トレンチ最終断割（前庭部から開口部を望む）



石室奥壁背面コッパ出土状況（東から）



石室奥壁背面土層断面（南から）



墳丘第1トレンチ コッパ出土状況（北から）

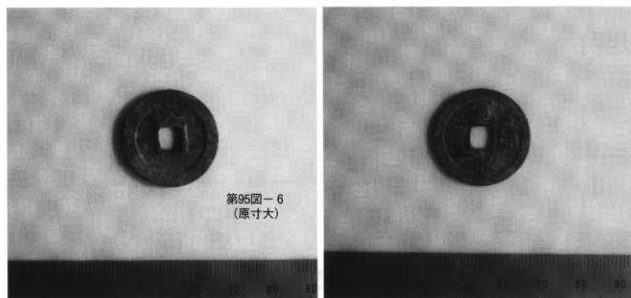


墳丘北西部の近世遺構と現代の石列（南東から）

図 版

P L A T E

[遺 物]



銭貨



外面



内面

第1次確認調査 出土遺物



第98図-8

A トレンチ 土器溜り A 出土遺物 子持器台 (俯瞰)



第98図-8

A トレンチ 土器溜り A 出土遺物 子持器台 (横から)



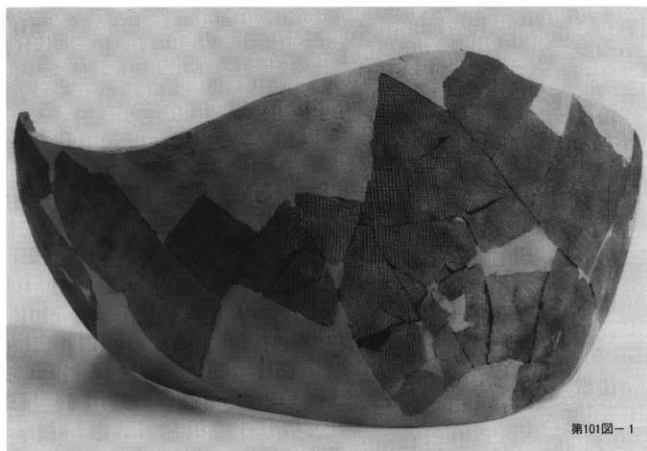
第98図-8

A トレンチ 土器溜りA出土遺物 子持器台（復元途中）



第96図-8

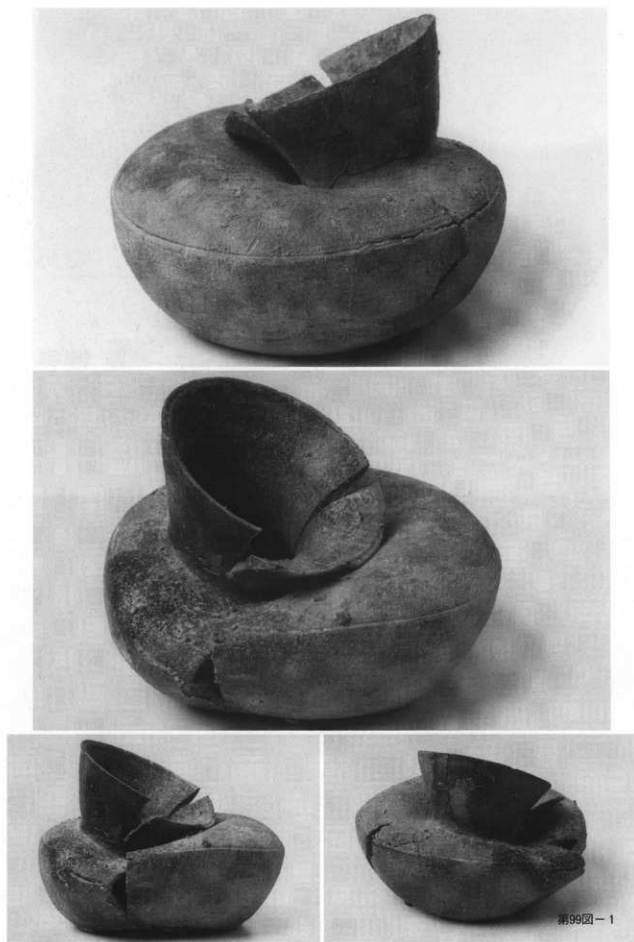
A トレンチ 土器溜りA出土遺物 子持器台の台座か



A トレンチ 攪乱出土遺物② 外面



A トレンチ 攪乱出土遺物② 内面接写

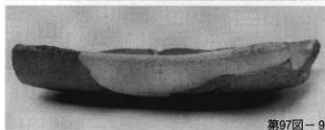


A トレンチ 満201出土遺物

第99図-1



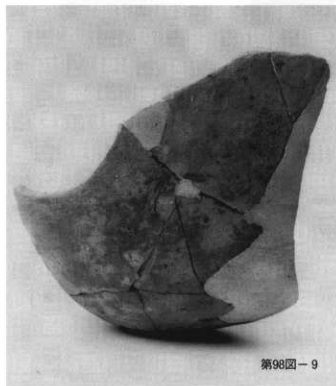
第99図-3



A トレンチ 土器溜りA 西側サブトレンチ 第1次確認調査出土遺物



第98図-1



第98図-9



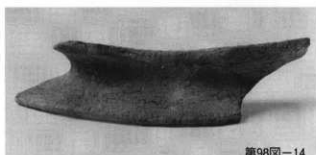
第98図-10



第98図-11



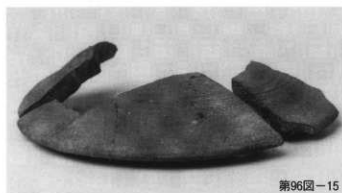
第97図-6



第98図-14



第97図-11



第96図-15



第96図-14



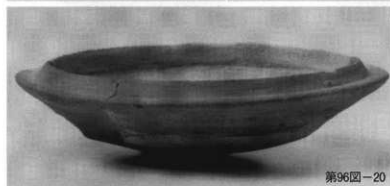
第96図-12



第96図-16



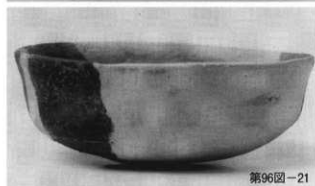
第96図-13



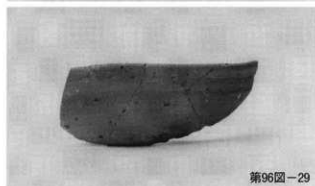
第96図-20



第96図-33



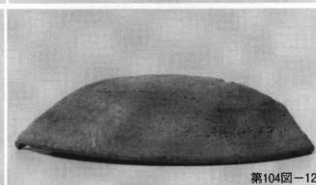
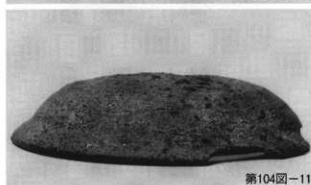
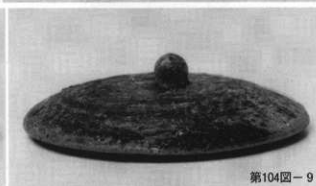
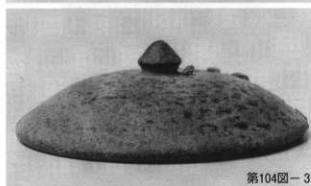
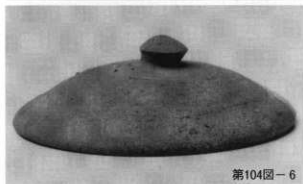
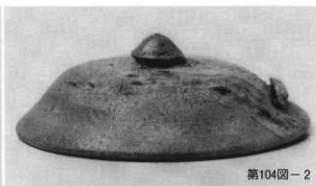
第96図-21



第96図-29



第96図-34



墳丘裾部テラス面出土遺物



墳丘裾部テラス面出土遺物



墳丘裾部テラス面出土遺物



墳丘裾部テラス面出土遺物

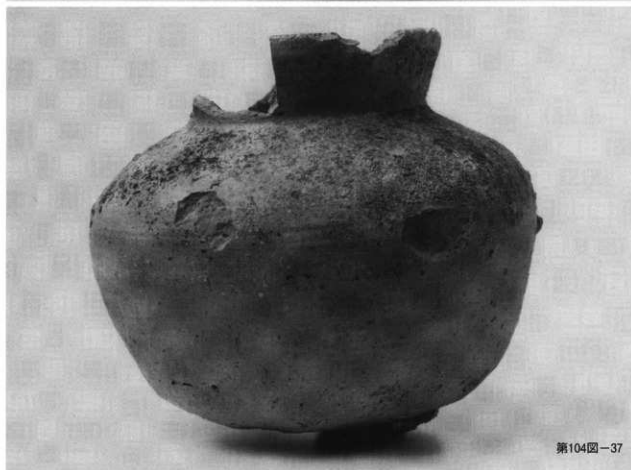


第104図-34



第104図-34

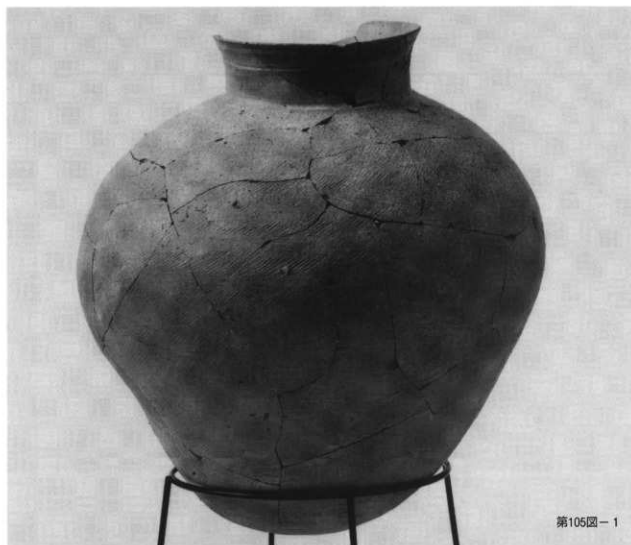
墳丘裾部テラス面出土遺物



墳丘裾部テラス面出土遺物



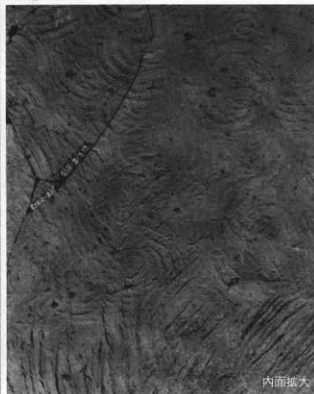
墳丘裾部テラス面出土遺物



第105図-1



外面拡大

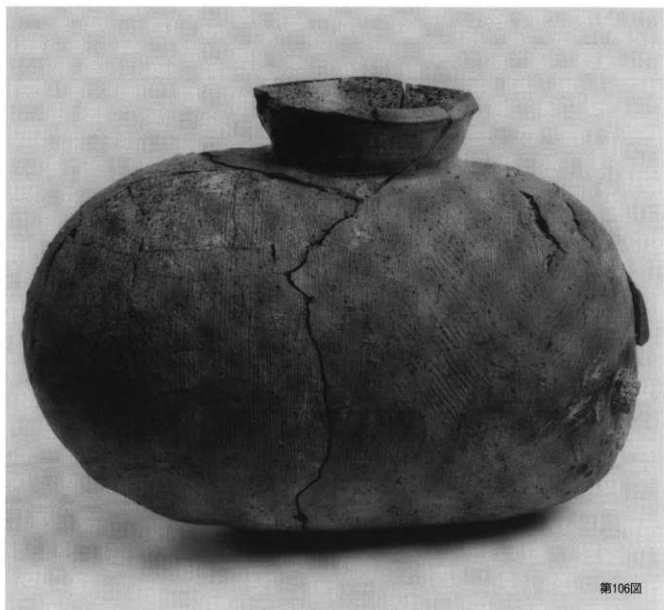


内面拡大

墳丘裾部テラス面出土遺物



墳丘裾部テラス面出土遺物

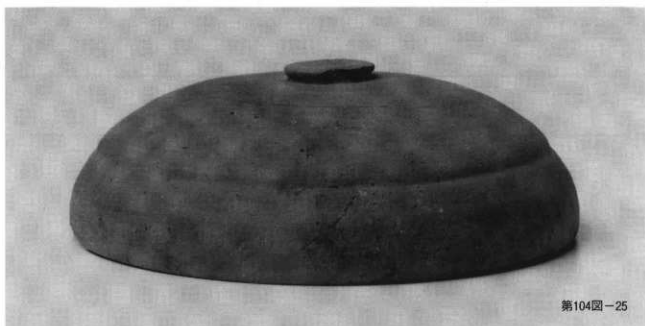


第106図



第106図 (内面)

墳丘裾部テラス面出土遺物



墳丘裾部テラス面出土遺物

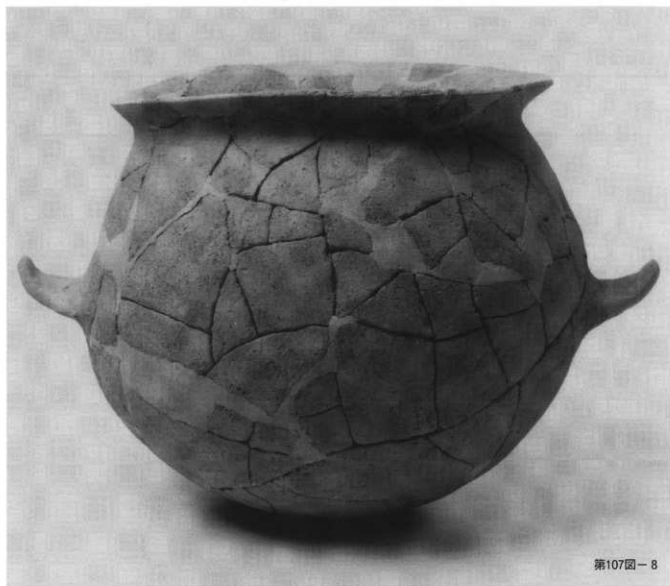


第107図-1



第108図-15

墳丘裾部テラス面（上）、前庭部（下）出土遺物



第107図-8



第107図-9

墳丘裾部テラス面出土遺物

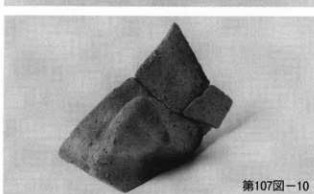
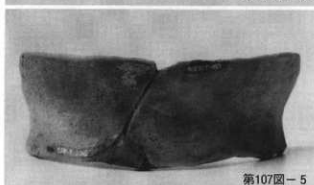
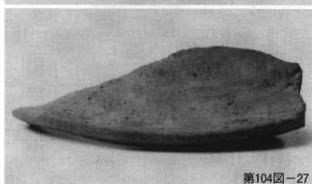
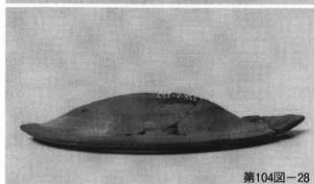
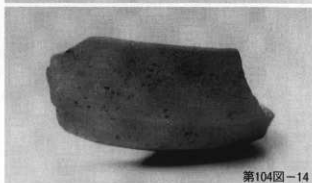
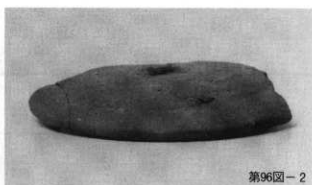
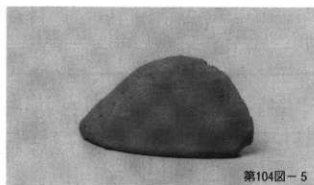


第107図-12

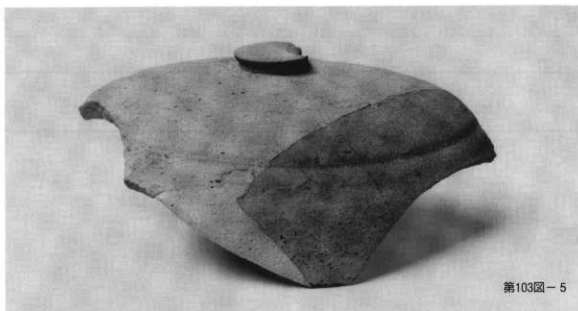


第107図-2

墳丘裾部テラス面出土遺物



A トレンチ・墳丘・墳丘裾部テラス面出土遺物



第103圖-5



第103圖-6



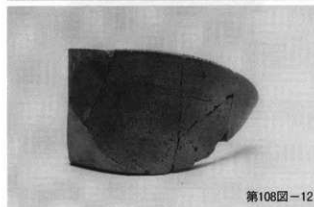
第102圖-8



第102圖-4



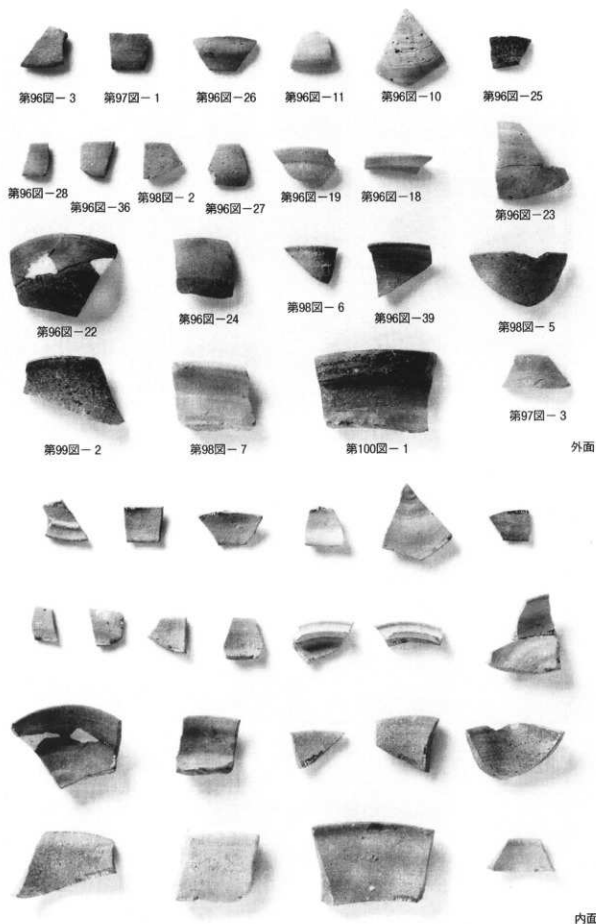
第102圖-3



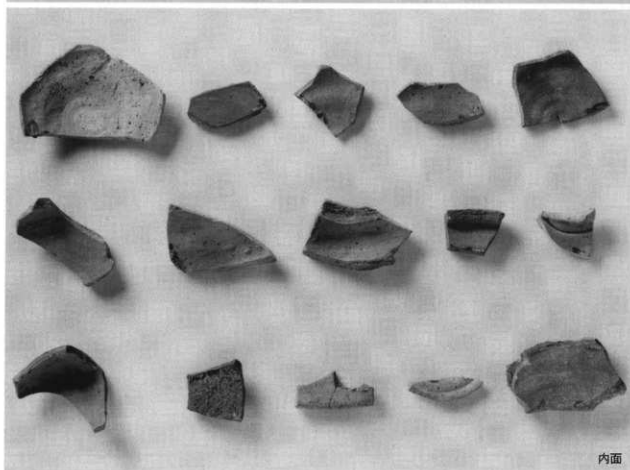
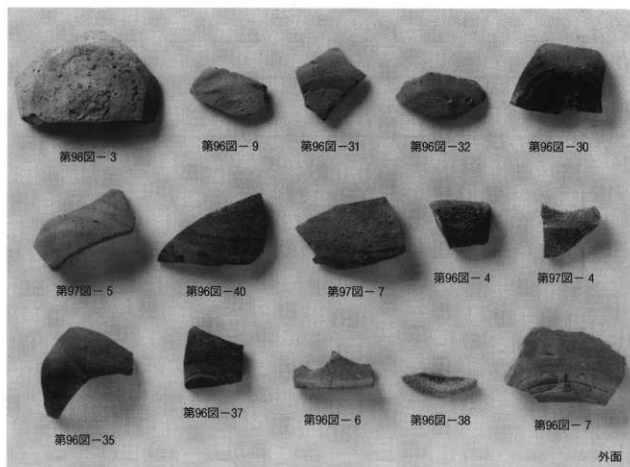
第108圖-12



第108圖-6



A トレンチ・西側サブトレンチ・土器溜り A・溝201・攪乱①出土遺物



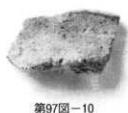
Aトレンチ・西側サブトレンチ・土器溜りA出土遺物



第97図-8



第96図-41



第97図-10



第98図-12



第100図-2



第98図-13

外面



内面



第104図-10



第102図-2



第104図-30



第104図-31



第104図-32



第107図-3



第107図-7



第107図-6



第107図-4

外面



内面



第102図-6

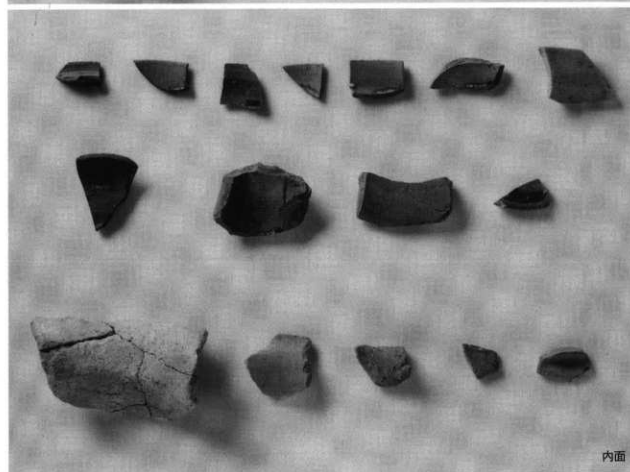
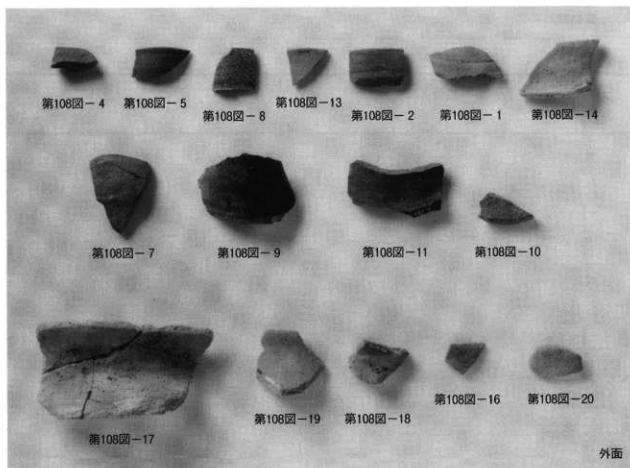


第102図-7

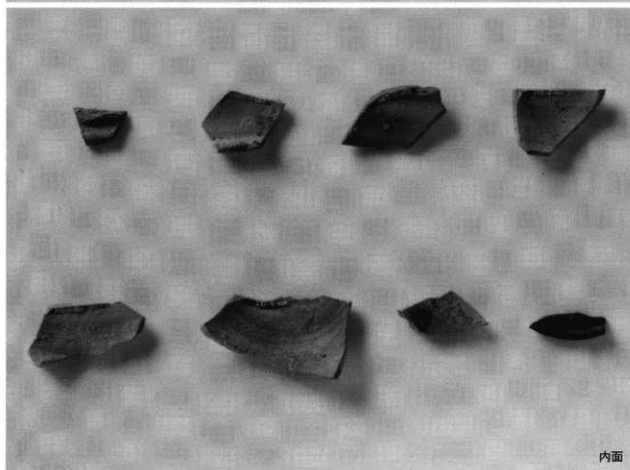
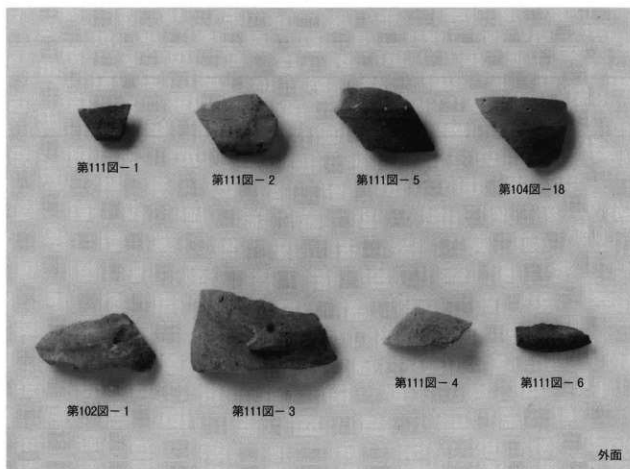
外面



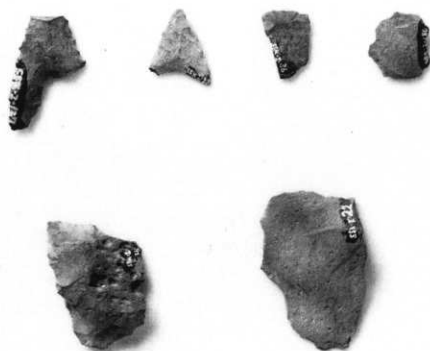
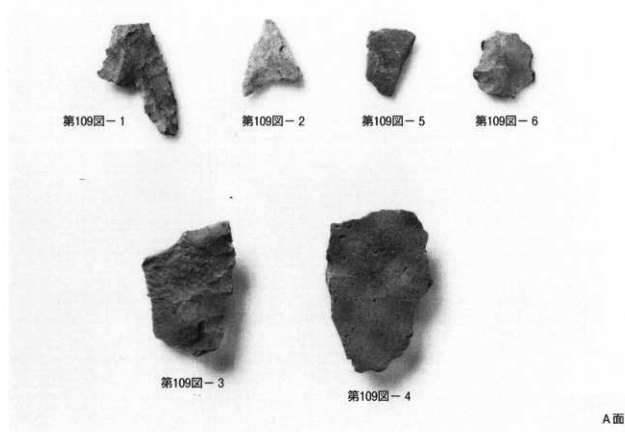
内面



前庭部出土遺物



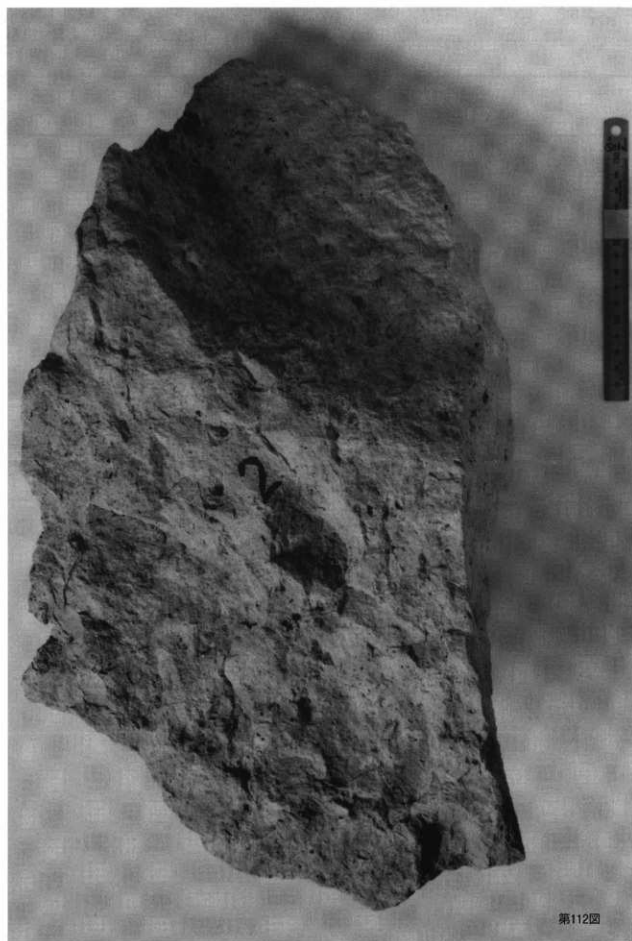
墳丘・墳丘裾部テラス面・表面採集遺物





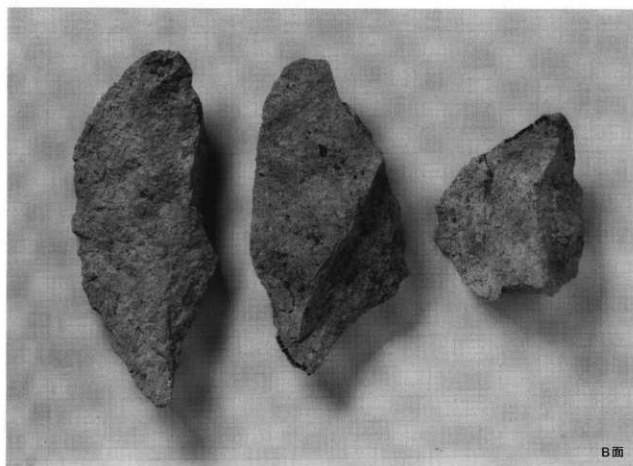
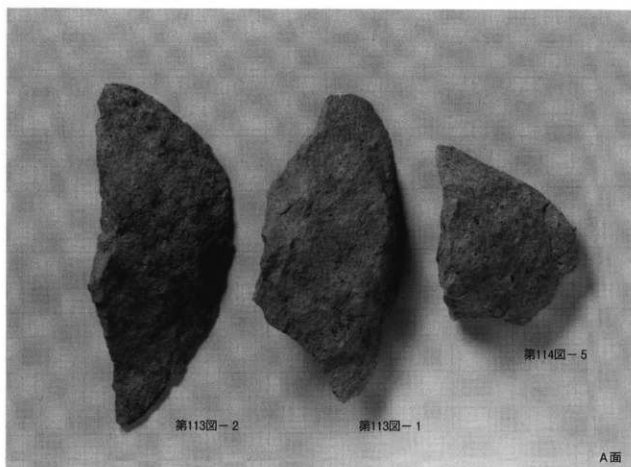
第112図

龜山石 大型剥片 (A面)

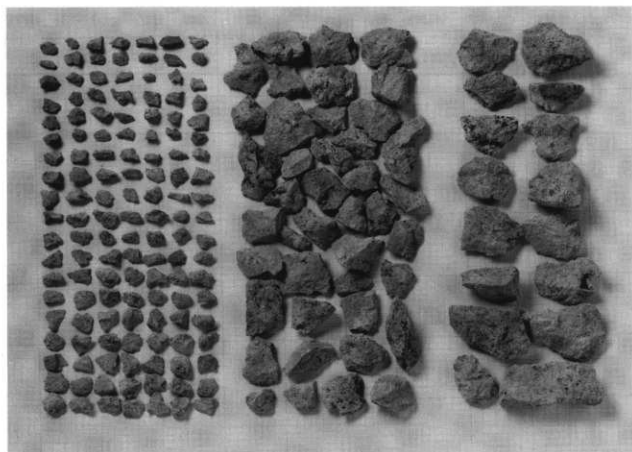


亀山石 大型剥片 (B面)

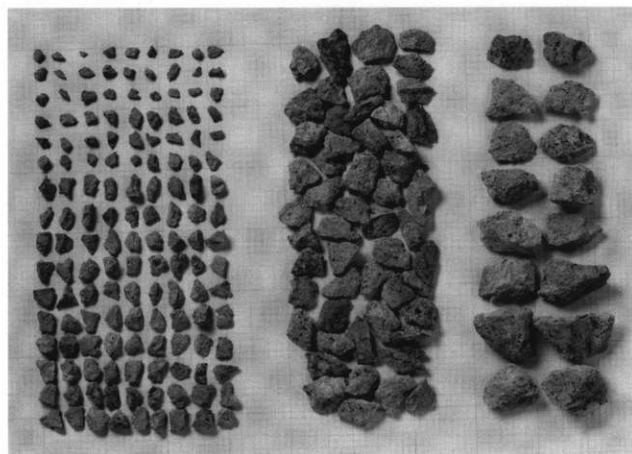
第112図



龜山石 中型剝片



龜山石法量別集合①



龜山石法量別集合②

報告書抄録

ふりがな	あさひづかこふん しろやまこふんぐんはつつちようさほうこくしよ							
書 名	旭塚古墳 城山古墳群発掘調査報告書							
副 書 名	第1・2次の確認調査結果の概要と多角形終末期横穴式石室墳の保存調査							
シリーズ名	芦屋市文化財調査報告							
シリーズ番号	第77集							
編 著 者 名	森岡秀人 坂田典彦							
編 集 機 関	芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課（文化財担当）							
所 在 地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号							
発行年月日	2009年（平成21年）3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード 市 町 村 調査番号		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
	兵庫県 芦屋市 山芦屋町 23番地	28206	SS旭 SSK-2	34度 74分 11秒	135度 29分 55秒	第1次 2006.0710 ～0815 第2次 2007.0702 ～1210	敷地面積 7438.01㎡ 調査面積 1578.5㎡	宅地造成
旭塚古墳 城山古墳群	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	古墳 採石場跡	古墳時代 ～飛鳥時代 江戸時代	多角形墳丘を呈する 横穴式石室墳 テラス・前庭部・ 隣接部祭祀遺構 近世採石遺構		弥生土器 土師器 須恵器 石器 耳環 銭貨		終末期古墳として知られる旭塚古墳の墳形形態に新たな知見をもたらした。テラス面に夥しい量の供献土器が遺存していた。石室床面と前庭部には竜山石が敷かれていた。	
要 約	兵庫県下で屈指の巨石墳として知られる旭塚古墳で、40有余年ぶりに発掘調査を実施した。3次元デジタル測量を取り入れた墳丘・石室精密図を新たに作成した。多角形の墳形を推定し得る貼石（外縁石）を伴うコーナー部の検出、山陽系の須恵器を含むテラス面の供献土器群、竜山石前庭敷布面の存在など、多数の新知見を得た。また、出土した子持器台は全国的にみても最も新しい時期に比定される。以上から、終末期古墳の中でも本墳の独自性や特異性をいくつも抽出することができた。							

編集後記

脇道から発掘調査の終わった事業地を眺めながら、旭塚古墳が未来の芦屋市民にどのような遺産として受け継がれていくのかに想いを馳せています。

この古墳は、私たちが発掘する以前から、専門の研究者たちが関心を寄せる古墳の一つでしたが、こうして一定の発掘調査が終了すると、その稀少価値は二倍にも三倍にも膨れ上がり、指定文化財クラス古墳であることをあらためて実感いたします。発掘が地域に新しい歴史像を結ぶとよく言いますが、古代の芦屋地方の歩みに全く新しい課題を投げかけるものでした。播磨・竜山石の特殊な使用法は、近畿地方初めてのケースですし、墳丘裾部から出土した大量の供献土器類は、不運にも400名以上のひとびとが訪れた現地説明会の翌日から姿を現し始めました。発掘現場である広い事業地も、まるで旭塚古墳が特徴的な山容を誇示する城山を借景として独り占めしたような印象を強く持ちました。

報告書は予想以上に難産でした。考えもしなかった土器の出土数、竜山石の膨大な石片調査、石室構造の系譜的理解、色々と詳しく考証すべきことを残しながら、事実報告だけは何とか本書に提示できたのではないかと思います。最近、発掘の成果は、地域の生活や文化に輝きを与える大きな資産だと思います。その活用をあらゆる方法を使ってやらねばなりません。旭塚の被葬者もきっとそれを望んでいることでしょう。

最後になりましたが、この地味な発掘事業と古墳の保全に協力された地権者、設計者、調査に加わって炎天下の下、掘り、図を描き、測量を行い、遺物や図面の整理にあたった作業員・補助員・ボランティアの皆様にご感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。



調査参加者と古墳の記念撮影写真

芦屋市文化財調査報告 第77集

旭 塚 古 墳

城山古墳群発掘調査報告書

— 第1・2次確認調査結果の概要と多角形終末期横穴式石室墳の保存調査 —

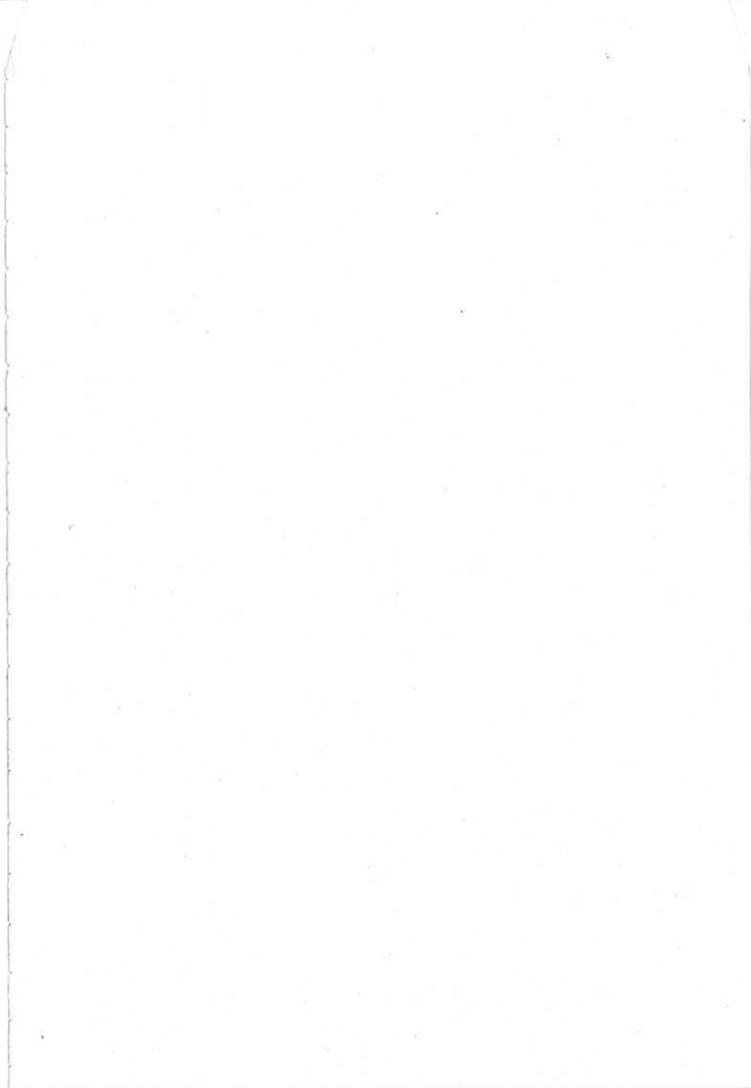
平成21年3月31日 発行

編 集 芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課（文化財担当）
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号
TEL 0797-31-9066

発 行 芦屋市教育委員会
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号
TEL 0797-31-9066

印 刷 有限会社 岸本出版印刷
〒652-0806 兵庫県神戸市兵庫区西柳原町3番地29
TEL 078-681-2456 (代)





旭塚古墳墳丘全体図 (S=1/50)

 $\gamma = 88.125^\circ$

第73図に拡大

Ashiya Archaeological Record 77



Ashiya City Board of Education, Japan